
チョメリプ2

タンポポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チョメリップ2

【Zコード】

Z2105C

【作者名】

タンポポ

【あらすじ】

タンポポが代表する二大 小説『チョメリディー』と『リプレイ』を混ぜちゃった新感覚コメディー！ 悪魔になつた明が赤い目を持つ譲の目を奪いにいく物語り。あ、もちろん前作を読んでなくても大丈夫です。

コフレイ～プロローグ

「ハツ、相変わらず弱えな譲」

『ぬせえ…お前だつて…足元フランジやねえか

「お互い最後の一撃だな」

『ああ、つむおいらー』

「ハアハア…やつぱ強いな

『へへ…やつ弱いって言つたじやねえか…ハアハア』

「せうすりやもつと燃えるかなあつて思つてよ?」

『確かにな…なあ、ずっと…俺いらじりして殴り合つてえな

「……ああ、約束…な」

『…フツ、次は決着つけるぜ』

-----。

「昨日をもつて、君は転校されました」

『待てよ先生！俺に何も言わないでか？』

「貴様には何も言つていなかつた。早く席に座つなさい。」

…ふざけんな…

『ふざけんなあ！…！』

…ハツ、夢…か。

俺の目が赤くなる原因となつた親友との突然の別れ。

あの頃の俺達は小学二年生だと言つて、日々喧嘩に明け暮れ、先生や親の言つ事も聞かない、今思えば本当に糞餓鬼だつた。

何で今更あの頃の夢なんて見たんだろう…。

もう俺の目は赤くならないのに。

もう直つたんだ。これからは普通の高校二年生。

今までの分も青春を感じなれば…！

朝、俺は悪夢のせいでいつもより早く目が覚めた。

もうあれから一年経つた。

俺は怒りを感じると目が赤くなってしまうという意味の分からない体質のせいで、人との関わりを避けてきた。

そんな時にエン・リューファという女の子…しかも天使と名乗る子が来た。

リューファが俺に『『えてくれたものは、生まれ変わる事。

しかし、俺はその権利を否定。

人として生きる事を選ぶ。

同じく目が赤くなる大樹だいきと友達になり、さらには、リューファまで

もが目が赤くなるという、何とも変わった奴ら同士が集まつた。

目が赤くなるとは、充血しているとかではなく、黒い瞳の部分が赤くなるのだ。

その理由として、俺は怒り、リューファは悲しみ、大樹は恐怖感…と、人間の弱い感情が溢れると…と言つのが原因だった。

つまり、全く逆の感情を得る事で俺達は元通りになつたのだ。

一度目が赤くなつてから、友情などには無縁だつたために、気付くのも遅れたというわけだ。

あれから一年、俺は怒つても目は赤くなる事はなかつた。

だから友達にも言いたい事が言え、平和な日々を暮らしていく。

しかし…朝、顔を洗いに洗面所の鏡を見て、俺は絶句した。

…嘘だろ…？

また瞳が赤くなつてやがる…。

チョメティーネプロローグ

「うひ、起きる」

——我が眠りを妨げる者よ、覚悟はいいな？

「うむせえよ！もう朝だぞ！？」

——我が眠りを妨げる…

「アラーム！」

「ドカーン！」

『うわあー！メルトー！めえ呪文で起こすのは辞めやつたべ？』

「じゃあ早く起きる」

…あ、えつむ。チョ・メティー改め、人間界での名前は明です。

以前は人間、チョメティーネの主人公をやつてました。

今、俺は魔界にいる。

人間として育つた僕が実はサターンでした…つてオチ…！
もつ参つちやう

でもまあ魔界の暮らしあるくないもんよ。

寮に入れられて学校に通うんだけどね、今まで人間だったから魔界の学校が楽しいの。

呪文だぜ呪文！？

ちなみに今、同居人のメルトって奴が唱えた アラーム つてのも呪文の一つ。

目標物一体の頭上に小さな爆発を起こすものだ。

ドラクエで例えるならイオみたいな？

「……鏡、見る？」

そう言つてメルトが手鏡を渡してきた。

フツ、鏡に映つた俺の甘いフェイスは5オ~65後半の乙女心を忘れない女性に大ウケでちなみに俺のストライクゾーンは外角低めです！

『フツ、今日もツイストが決まつ……またかあああーーー！』

アラームのせいで俺の髪の毛チリッチリ！

好きな料理はエビッチリ！
好きな教科は地理つ地…

「はい、アイロン」

ありがとメルちゃん。

若干滑つてた所を助けてもらつて。

そうそう、この服のシワを伸ばすアイロンで……今日もお勤め頑張つてね、あ・な・た……って何よこの口紅の後！ キイーー悔しい！ 浮氣したのね！

「お前のボケに付き合つてらんねえ……リバス！」

自分から振つたくせに……。

またメルトが呪文を唱えると、地理つ地理だつた俺の髪の毛が見る見る元のストレートに。

リバスとは元の形（姿）に戻す呪文だ。
以前、閻魔様の銅像をブチ壊した時にメルトが助けてくれた事もあつたな。

それも、システム上としては、同居人がパートナー。

俺とメルトは何をするにも一緒で、さらに失敗も連帯責任。

俺の寝坊はメルトの失敗にも繋がるので、毎日メルトは必死で俺を起こす。

その度に俺は危険な思いをしているわけだ。

こっちに来てから俺も何個か簡単な呪文は覚えた。

しかし、呪文とは私欲の為に使つのは禁じられている。

さらに、呪文はメンタル力を使うので仕事の時以外は好んで使わな

いのだ。

「ほら、今日も仕事だ。また人間界に行くぞ」

メルトが支度を終え、俺に出発の合図を出す。

もう人間界に行けないとと思っていたが、実は仕事で何回も行っている。

しかし、これも決まりでターゲット以外の人間との関わりも禁じられているため、昔の友達と会う事はなかつた。

「今日の仕事内容はターゲットの血液500ミリの調達だ」

メルトが今日の内容を口にする。

俺達サターンの食料は人間の生き血だ。

メルトは冷静沈着で優秀。さらに卑劣も持ち合わせるエリート。

どんな過酷な仕事も顔色一つ変えないでこなしていく。

「準備できたな、いざ人間界へ…」

メルトの呪文と共に俺の意識も薄れしていく。

俺達は人間界の上空に浮いている。

「奴がターゲットだ。行くぞ…」

メルトが蒼い瞳を鋭く尖らせ、艶やかな長髪を風に靡かせて言った。

『OK、美少年』

俺は右手を高く上げ、精神を集中させた。

『コルト…』

指先から黒い光が出ると、それがターゲットに命中。

コルトとは、目標物の運気を一時的に大幅に欠落させる呪文だ。

「ぐはあああ…！」

ほら、ターゲットも口から血に覆いてその場に倒れ……あれ？

「馬鹿野郎！また失敗かよ！間接的に血を取らないと駄目だろうが…！」

あれえ？ 本当はターゲットを転ばせて、転んだ先にガラスの破片が落ちてそれで出血を誘つたんだが… どうやら失敗みたい

―――。

「また貴様いらか…」

「申し訳ありません、閻魔様…」

『わりい、またミスつちまつた』

「メデイーー！頭が高いよーってか言葉使いに氣をつけろ」

メルトは閻魔の前で片膝を地面に着け、頭を下げている。

「まあよい…メデイーー、貴様はサターンの血を受け継いでいるためその呪文は強力過ぎるのだ…そのせいで、まだ未熟な貴様に「コントロールは難しいのは分かる…ただこう何回も失敗が続くとのう…」

俺の父は名高いサターンらしい。その血を受け継いだまでは良いのだが、18歳まで人間として育つた俺は、幼い頃からの修業もしていない。

よつて、体と心がついていけないのだ。

閻魔様はため息をはくと、契約書にはんこを押した。

「閻魔様？次の指令は？」

メルトがそれに気付き、恐る恐る聞いた。

「危険度、難易度、共に最高ランクの仕事じゃ」

閻魔様はいやらしい笑みを見せると契約書を突き出した。

「…赤い目…剥奪?」

メルトの顔色は強張つたままだ。

「最近人間界にまた赤い目を持つ者が現れた。その目を奪つてこいい」とメルトはまだ修練中ですよ?」こんな仕事のレベルまで達していない!」

「心配するな。メルトは同期の中でトップの成績。メディーは強力な魔力が潜在している。」これも一つの試練じゃ

「…そんな

普段は常に冷静で、滅多な事にしか表情を変えないメルトからは、汗さえも流れていた。

「もし任務が成功すれば一人の階級を上げよう」

魔界にはそれぞれ階級がある。

デビルにA、B、Cと三段階。

殆どの奴はここにいる。

ちなみにAが一番良い。

さうして階級が上がるトーモンの称号がもらえる。

デーモンになれるのは、ほんの一握りの悪魔だけであり、デビルの憧れだ。

メルトは『デビルA』のトップ。最も『デーモン』に近い存在と言われているが、まだ早い…といつも言っている。

これは魔力や、判断力、仕事の成績によつて分けられる。

年齢は全く関係ない。

閻魔様の歳が俺より下なのがいい証拠だ。

まだ十歳くらいの毛も生えそろつてないようなガキが語尾に じゃとか自分の事 ワシ とか言つなよ。

ちなみに俺の階級は『デーモン』の上をいくサターン 仮 だ。

なぜかと言つと、判断力や成績は赤点でも、それを補える程、魔力がありえないくらいあるらしい。

だが、さすがに危険とのことで、今はまだ『デビル』の奴と同じ扱いだ。

それで、『デビルトップ』のメルトとパートナーを組んだ訳だ。

俺がサターンと知つてゐるのは閻魔様とメルトだけだがな。

「ターゲットは日本。名は木下 譲。天使が気付く前に狩つてこい！」

「はい…！」

ロブレイ第一話「俺が…能力者?」

なんでもまた田が赤く…?

ちよ…落ち着くんだ。今日…いや、俺は今怒つてなんかいない。

朝の夢があつたとは言え、特別な感情は出していいない…。

…どうする、どうする俺…

「——譲君…」

ふこに後ろから声をかけられてビクついた心臓。

……「」の展開はあの時とこつしょだな。

「」の俺の家なのに勝手に入つてこれるつて言つたら…

「大変よ譲君…って、何よ、その…またお前か…みたいな顔は?」

やつぱりリコーグア…いや、變だつたかな?

『いや、展開の流れが的中したからな』

「もつ…あら…ずいぶんとわつぱりした髪形にしたわね

まあ、一年前は田を隠すために髪伸ばしてた訳だし。

『つてそつだ…變、なんか…俺の田、また赤くなつちやつたんだけ

『びへ..』

「ええ、事態が良くないわよ」

驚かない愛を見ると、じつやら俺の朝の様子は簡抜けらしげにな。

「あなたは選ばれし者なのだあ！」

バーン…という効果音が聞こえそうな程、人探し指を俺に向ける歟。
…うわあ。

「ちよ…なんかツツコミ入れてよー！」

だつて…ねえ？

そもそも愛、キャラ変わったの？

「天然美少女な設定よ」

設定とか言うなよ。

つか俺つてもつと暗い性格だった気が…。

「そんな事より、悪魔が譲君の田を狩りに来るわよ」

ほお〜、そりゃ大変だ。まあ、赤い田はもともと殺さなきゃいけない存在だしな…………は？

『はあー！？』

「反応遅いよ」

ちゅつと待て、どういう意味だ？

愛がいるくらいだ。俺は天使や神の存在を信じるよつになつた。

つまりは悪魔だつて実在するのだう。

その悪魔が、俺を狙いに？

「なぜ赤い目を持つ者は殺されてきたのか…それを説明してあげる」

愛の話によると、赤い目には何かしらの 能力 があるらしい。

それは、いずれも人間離れした能力。

それを悪魔が欲しがるらしい。

それを恐れた天界は、今まで殺してきたとか…。

「私も狙われているの。だから天界を追い出されちゃつた…」

愛も赤い目を持つ一人。

天界に悪魔が攻めて来られては堪らないとの事で人間界に来たらし
い。

…ん？ つて事は…

「これから一緒に住むから ヨロシクねえ～」

ええ～…やっぱこの展開きましたか…。

「もつと喜びなさいよ、こんな可愛い子と一つ屋根の下で暮らせるんだから」

まあ確かに愛は可愛い。

大きな瞳に腰まで伸びた艶やかでストレートな金髪。

小柄な体格で幼い顔立ちで羽がついてりや、そつち系の人を受けようなんだ。

「ちなみに私の能力は慈悲能力。怪我や傷口を塞ぐ事ができるの。譲君のはまだ謎。…それから、あの人の所にも行かなきや…」

愛が言つたあの人とはただ一人…三人目の赤い目を持つ人間、沢田大樹だろう。

チヨメティー第一話～僕の仕事？赤い目を狩るの！～

『 なあメルト、なんで閻魔様は赤い目を欲しがるんだ？』

「赤い目には能力があるらしい。譲つて人間の能力は 破壊能力だ。それでだろう」

『 狩るって…言つと…やつぱり…』

「ああ、スパツとな」

きやー野蛮！

聞きました奥さん、目をスパツですつて！
グロいグロい、俺には無理ですそんなの。

「この仕事が失敗したら閻魔パーク行きだとよ

『 マジで！？閻魔パークって言つたら、あの噂の美女に囲まれてウハハンな所か！？』

「いや、全く逆の生き地獄

… やべ、怖えや。今回は真面目にやる。

『 でもさ、閻魔様が欲しがる程の破壊能力だろ？俺達じゃ危ないんじゃないの？』

「かなり危険だ。だから難易度MAXつて言つただろ？』

…どちらにしろ危険か。

元人間の俺が人間の目を狩りに行くのかあー。

なんか可哀相だし乗り気じゃないなあ…。

「メテイーー見つけたぞーあいつが譲だ」

上空から田をこじり見てみると、そっぽりした短髪のさわやかボーイがいた。

…女連れ？ 可愛いじゃねえかちくしょー。

「ちひ、もう天使に先回りされていたか

天使？ あの女の子が天使なの。

『あれ？ リューファじやん』

譲の隣にいるのはHON・リューファだった。

「知ってるのか？」

『前作の最終話でちよつとな』

「良く分からんが、あの天使は譲のガードみてえなもんだ。おそらく付きつきりだらう

付きつきつ…？

住み込み…?
夜の當み…?

許さん…!!

『メルト…本氣で行くぞ…』

「お…おつ。今回はやる氣だな」

『ああ！男性読者のためだ！』

「……………？」

『作戦は…？』

「破壊能力…一体どんなもののがまだ分からぬ。ここは慎重に様子見だな…」

『分かつた！とにかく突っ込むんだな…とりやああ……』

『…判断力赤点野郎が…』

俺は勢い良く譲に突っ込んだ。

「譲君、悪魔よ…」

リューファが俺に気付く。

「明…？」

ああ、俺・久しぶりに人間の名前呼ばれたよ。

「一年ぶりね」

『ああ、だが今日は敵同士のようだな』

「…そうね」

『こつたも仕事だ。なりふり構つていられない。

相手は女だろうが本気で行くぜ。

くらえ…俺の最大の呪文。

『ディーメ！』

右手に黒い光が集まり、それが大きくなつていく。

集中…それさえできていれば俺だつて操れるんだい！

どんな呪文か、どちらを狙つているのかが分からぬ二人は身構えている。

俺の狙いはもちろん譲だ。極力、女の子は傷付けたくない。

よし、出力最大パワーが貯まつた。くらえ人間！！

「愛ちゃん！譲君と距離をとつて！悪魔の狙いは譲君だ！」

黒い光の発射と同時に新しい人間が現れた。
俺の思考が読まれた…？

「譲君、一度右に回避した後、すぐ後ろに飛んで！」

なんてこつた！

呪文の効力まで読まれている。

「ディーメ」という呪文は単体の光線だが、一度地面に接するとターゲットの方にもう一度伸びる攻撃だつた。

その第一の矢も後ろに飛ばれ避けられてしまった。

『ちつ…もう一度だ…』

「辞めるメティーーーそんなの当たつたらターゲットは木つ端みじんに吹き飛ぶぞ？」

そうだつた。目的はターゲットの赤い目の剥奪。跡形もなく消してしまっては無意味だ。

「それに見る。お前の呪文を読み切つた人間の目も赤いぞ？あいつも能力者だ」

『能力者一人に天使か。人數的にも分が悪いな』

「ああ、ここは一時退却だ」

悔しいがそうするしかないな。

『勝負はおあずけだ！それでは、さよなら十、…』
「それはパクリだから怒られるぞ」

リプレイ第一話／何もできない主人公

「譲君、 悪魔が近くにいるわ」

『なにーもう来たのか?』

「ええ、 奴らの視力は32はあるわ。 おそらく上空からこいつらの様子を見るわね」

視力32つて…。

「…來たわ！」

空に浮く二人の悪魔。

その一人が勢い良く飛んでくる。

「ディーメ！」

何かの呪文だろうか？ 右手に黒い光が集まり大きくなっていく。

あんなの、 くらつたら死ぬぞ！？

「譲君！」

あれは… 大樹！？

どうやら向こうから来てくれたようだ。

大樹の目もまた赤くなっている。

「譲君、一度右に回避した後すぐ後ろに飛んで！」

『お…おひー』

黒い光の物体が俺を目掛けて飛んでくる。

大樹の言つ通り、まずは右に回避。

その後すぐ後ろに飛んだ。

勢い良く飛んだので尻餅をついてしまった。

目の前には、俺がいた二つの場所が、アスファルトなのに…えぐれていた。

あ…危ねえ…。

攻撃を外し人数的（俺は何もできないが）にも分が悪いと判断したのだろうか、悪魔は撤退していくた。

『大樹、助かつたよ』

「危なかつたね。…ぐつ」

『どうした！？大丈夫か！？』

「大丈夫…ちょっとフラッときただけだから」

「どちら能力を使うとその代償があるらしい。」

大樹の場合、思考看破能力。

つまり、相手の思考を読み取れる能力らしい。

しかし、それは相手の脳から直に読み取るため、情報量の多さに脳が付いて行けず、破裂しそうな程の痛みが伴うらしい。

「譲君、さっき尻餅ついた時に足くじいたでしょ？」

なんか足がズキズキすると思つたら血が出ていた。
足首は軽い捻挫をしたみたいだな、こりや。

「…まかせて」

愛の手からポツと温かい光が足に当たられると、傷がみるみる治つていく。

ひねった足首も、曲げてもなんともない。…スゲエな。

「それが愛ちゃんの能力…」

「これが慈悲の能力よ。たいした怪我じゃなければ代償もないわ」

愛の代償は自分の精神力。まあMPみたいなもんらしい。

「それで、譲君の能力は？」

「それが問題ね。次に悪魔がくるまでになんとか見つけないと…」

「えー？ 分からないの？」

「…なんか足引っ張ってるみたいで、ゴメンなさい。」

でも、確かにそうだ。状況は良くない。

俺の能力は何なんだ？

「僕の場合は、勝手に人の思考が読み取れたのが始まりだったんだ。
譲君も何か変わった事ない？」

変わった事…ないな。

なにしる、ついさっき気付いたんだ。

「つてかさー何でまた急に目が赤くなつたの？」

大樹の言つ通りだ。トラウマが原因で赤くなつた目。

治すには逆の感情を持つ事だったし、それで治つたはずだった。

「それが問題点一つ目。あれは私達の勘違いで、一年前に赤くなつたのは、能力覚醒の前兆だったの」

「うわ、つて事は俺ら恥ずかしくね？ 前作で普通の高校生だ〜とかほざいちやつたの？」

「とにかく！ 次に悪魔が来た時、能力が分からぬ事を気付かれないようにしてね！」

もしバレれば、それが命取りになるってか…。

しかし、今のうちに何かしらの対策を練らないと…

次こそ…殺される。

チョメティー第一話～能力の欠点発見！

赤い目…結構やっかいだな。完璧に俺の思考が読まれるとは…。

リューファの能力は慈悲だから、俺達が攻撃される事はないが、せつかく与えたダメージを回復されれば堪つたもんじやない。

こつちも呪文使える回数は限られているんだ。

それに加えて、譲の破壊能力。

……一体どうすれば…。

「なあ、メティー。一つ気付いたんだが…」

『なんだよメルト。戦闘に参加しなかつたくせに』

「観察してたんだよ。それで気付いたんだが、おそらく譲は自分の能力に気付いていない」

：確かに、その可能性はあるかも。

俺とメルトが話していた時が、向こうの攻撃の最大のチャンスだつたはずだ。

こつちが殺そうとしているのに抵抗の能力も使わなかつた。

いや…使えなかつた。

使い方を…知らないから？

何にせよ、メルトがそう言うんだ。あながち嘘でもないだろうな。

『譲が能力に気付いていない今がチャンスか…』

『だが、思考看破能力を持つ人間はどうする? こいつの攻撃は全て奴に筒抜けだぞ?』

「なあーに、そんなのすでに手は討つてあるさ」

さすが『ビル成績トップだ。頼りになるぜ。』

『じゃあ早速…』

「ああ、リベンジ…いや今回が本当の戦いだ」

一時間も間が経っていないまま、再び能力者の元へ。

「嘘…もう来たの? 譲君、気付かれないように…分かつてるわね?』

リューファの表情が堅い所を見ると、討つ手なし。やはり譲は能力に気付いていない!

『メルト、作戦は?』

『フフ…ヒソヒソ』

『分かつた! ヒソヒソだな…』

『いや、小声の効果音を口にしただけなんだが…』

『メルトのキャラでボケは無理!ってか、あんたコメディーに場違
い!』

つと、もめてる場合じゃないか。

メルトの作戦通り動くけど、思考は読み取られるんじゃないのか?

まあいい、ここはメルトを信じるしかないか。

「作戦開始!」

『おうー!』

俺達は二手に別れ、まずは思考看破能力を持つ大樹狙いにした。

今の所、譲はただの人間だ。攻撃される心配はない。

「大樹君、能力発動して!」

「……………くつ」

「どうしたのよ?早く!」

「……………読めない」

「ハハハ! 聞いたかメルト。俺達の思考が読めないとよ!」

作戦は成功みたいだぜ!

「いいかメディー。思考に漢字を使え。大樹は学校に行つてなかつ
たみたいだから、かなり頭が悪い」

ハハハ! まさかこんなバカな展開になるとはなあ。

…いいのか、こんなオチで。

読めない つて…思考じゃなくて漢字が読めないって事？

なんでチョメティーだと戦闘シーンもこんな緊張感ないんだ…。

「メティー！お前は右から回り込め。挟み打ちで近距離まで詰めてから威力を抑えた呪文で攻撃だ！」

「メティー！お…は…から…り…め？」

平仮名だけ読まれたー！

もう良いや。勝負は早めに着けるか。

俺は右から、メルトは左から回り込み、距離を縮めていく。

大樹の弱点さえ分かれば、狙いは譲だ！ メルトも同じ考えだらう。

俺達空を飛べる悪魔のスピードに人間が付いて来れる訳もなく、距離はもう一メートルもない。

俺とメルトは譲に手を向ける。

…これで終わりだー！

ロフレイ第二話～戦闘シーン～段落

まだ一時間も経っていないうちに、再び悪魔が現れた。

「これは何の対策も練ってねえってのに、ちつとは空氣読め！」

「フツ、譲君。空氣は吸つものだよ」

「うぜえこいつ！」

『俺の思考読まないで悪魔の思考読め！』

「せうよー早くー！」

気が付けば、悪魔が既に行動に移っていた。

「……読めない。僕、学校行つてなかつたから、漢字読めないよお

！」

馬鹿かこの展開はあ！

え？ 終わり？ 僕達死ぬのか？

――ヒュン。

耳元を風が吹いた、その刹那。わずか一瞬にして間合いを詰められ

た。

二人の悪魔に挟まれて手を向けられている。

やばいやばいやばい…俺、絶対死ぬよこれ。

ふうー、どうせ死ぬなら、最後に悪あがきでもしてみるか。

『待て…』

と言つてそれぞれに手を向けると一人は手を降ろした。

……ホントに待つてくれたよこの悪魔達！

こりゃ案外、ハッタリが通用するかも。

『…使うぞ？俺の能力』

「貴様が能力に気付いていない事は知つてゐる。無駄なあがきは辞めておけ」

もつこのメルトって人ヤダア！ 絶対コメディーに場違いだよ。

「じゃあ、目を頂くか…カマルト」

メディーって悪魔が呪文を唱えると死神が持つてそうな大きな鎌が出て來た。

それを大きく振りかぶりの、Bボタン連打でパワーを貯めーの、はい勢い良く目え目掛けて飛んできたあ！

あんた「メディー向いてるけど、ノリで死にたくはねえよ。

『うわあ！来るなあ！あつち行けえ！』

――ードン。

硬く閉じた瞳を開けると、20メートル先の壁に、血を吹き出しながらめりこんでいるメディー。

あれ、死んでないよね？

俺、人殺しなんてしたくなえよあ！
ん？ でもメディーは人じやなくて悪魔だし。
つてか悪魔つて死ぬとどうなるんだろう？

『最近セリフが少ない愛さん！お答えは？』

「は？ んなもんアタシが知る訳ねえじゃん」

グレた！ 天使なのにグレてるよおい。

「ちつ…能力覚醒か」

ア然とした表情のメルトが呟いた。

能力覚醒…？ これが能力か。俺の能力は攻撃系なのか。

『メルト、早く消えないとお前にも食らわすぞ』

「ちつ…」

メルトは素早くメテイーを壁から引き抜くと、消えていった。

「もお！なんでメルトにも食らわせなかつたのよ！殺せ殺せえー！」

恐つ。グレ愛のキャラ恐いよ。

『あれば裔しだよ。奴らが消えてくれて良かつたよ

どうやら俺の能力の代償は体に負担が掛かるらしい。

腕がフルフル痙攣していやがる。

「まあいいわ。じばらくは悪魔も来ないでしょ。とつあえずやる事
は…」

愛が大樹を見る。

「あんた、勉強しなさい」

うん、やつぱりそうだよね。

チヨメテイー第三話～やつとコメテイー来たー！！

「メテイー、大丈夫か？」

誰かに呼ばれている。

でも体中が痛くて動けない。

俺は一体どうしたんだっけ……？

うーん…ハツ、思い出した。

俺は人間界に行つた時、余りのカツコ良さにファンの女の子複数に追つかれられ、抑え切れない欲望のあまり拉致されてしまったんだつた。

ククク、まさか悪魔の俺でも氣を失うハードプレイをされるなんて。

しかしこれからが本番だ。今度は逆に俺様がいじめてやるぜ

「あ、生きてた」

ふふ、メルトか。

……何いー！？ メルト？

いけない。確かにメルトは良い奴だし美形だけど、俺達は男同士だぞ！？

ついにそっち系のドアもノックつか？

だが…メルトが求める以上、致し方ない。

『メルト…』

「うわっ、気持ち悪い…離せよ…アラーム…」

もうその呪文ヤダ…。

「…で、田は覚めたか？」

『ああ、おかげさまで』

妄想から覚めた俺は譲に能力を使われ氣絶した事を思い出した。

「メディー、お前は無意識のうちに防御呪文を使っていたみたいだな。そのおかげで死ななかつたんだぞ」

『俺？そんなの使つた覚えないけど？』

「つまり、お前に潜在された魔力が守つてくれたんだりつ。見る、このネックレス」

あ、それは俺が魔界に来た時、闇魔様からもうつた魔后石のネックレス。

碎けてる?

「そうだ。魔后石が碎けるなんてありえない。あの破壊能力はかなり危険だ」

『じゃあどうする?』

「しばらく時間が必要だ」

メルトは成績優秀。その反面、負けず嫌い。

能力者と言つても、たかが人間。

そんな人間に何も抵抗できずに引き返してきたのが悔しいのだろうな。

『そんな難しく考えるなよ! 閻魔様だって時間くれたんだからさ。今日は気晴らしに人間界で休息しようぜ?』

難易度が高い仕事程、任務達成までに時間はかなりもらえる。

今回の仕事は最大に危険なため、それなりの準備も必要なわけだ。

その達成期限まで一ヶ月。これだけあれば充分だ。

「…いや、一刻も早く赤い目を…」

『焦る事はないさ。それに、俺も魔力を使い果たしたらしい。だから今日は骨休み。それに、仕事以外で人間界来たことないだろ? 色

々と案内してやるよ』

魔界の娛樂の一つとして、人間界へと行き来も自由とされてる。

もちろん人間の姿に変身してだが。

普段、他の悪魔達はけつこう行つてゐるみたいだが、メルトは休みの日も修業や勉強と、ヒッキー君なので、たまには楽しませてやるといふ。うん、俺つて優しい。

「じゃあ行くか」

『あいよー』

メルトの呪文で俺達は人間の姿に。

尻尾や翼が消え、人間のバーツが組み込まれる。

つてな訳で人間界に到着。ああ、懐かしいねこの感じ。

『人間界の樂しみつて言つたら…これだ!』

「キヤバレー天国?…人間界にも天国があるのか?いや、そんなはずは…」

もう、メルちゃんつたら、分かつてゐく・せ・に

ハハハ、俺達は18歳だからいいのさー

ムフフ、いやあー読者の方も好きですかー。

まあ俺が中の様子を絶妙なナレーションであなたを官能の世界に招待しようじゃないか！

まだ不思議がつていてるメルトを引きずり、店内に足を踏み入れると、さすが店名がキャバレー天国だけあって、女の子が天使の格好をしている。

「な……こんなにたくさん天使が！…？」

これにはメルちゃんもビックリ！

「いこつら…まさか刺客か！」

それは違う！ 誤解だメルト！！

「メティー、全力でいくぞ！」

『馬鹿、待て待て…。この娘達は皆人間で…』

「メティーの田もじまかすとはやるな、天使ーだが俺は違うー！」

もつ何言つても駄目だこりや。まだメルトには早かったようだな。

…一応、皆に防御呪文唱えとこ…。

「くりええーアラームラティーー！」

よりによつて爆発系統の最大の呪文使いやがつた…。

（ドバーーン）

この日、一つの店が潰れた。俺の防御呪文のおかげで、幸い死者は出なかつたが、多くのケガ人を出した。

「君ねえー 困るんだよ。爆弾なんて持ち込まれや…」

そして俺とメルトは違う店の事務所に連れて来られた。

「ここのはホストクラブ。ま、ここの裏の店はどうも繋がつてゐつて事だ。

しかも皆さん筋者の方達で…。これ俺人間のままだつたらビビりまくつてゐるよ今頃。

「これじゃあ、あの店も当分営業できないでしょ？君達には体で稼いでもらうからねえー 警察に連れてかれないので感謝しなよ！」

ケツ、何が感謝しきだ。警察に調べられたらヤバイのはあんたらだらうが。

ハア…しかしああ、やっぱこいつなると思つたよ。

「まあ君達、顔立ち良いからすぐお嬢さん付くよ。まずこれに着替えてな」

メルトはかなり美形だからな。下手したらノン・エコなつちやうんじやないか？

あ、無理か。メルトは女の子と話すの嫌いなんだった。

とつあえず渡されたのに着替える。

はい、尻尾、翼、角となぜか悪魔スタイル。

「ホストクラブ地獄。ここでは皆には悪魔の格好してもらってるんだ…って君ら妙に似合つん！」

支配人もこれにはビックリだった。

だつて…僕ら本物の悪魔ですしね。

つてか男が「オスプレー」とは逆転の発想ですね。

だが、これが以外とヒットしている。店内は活氣づいてるし客付きも良い。

「指名入りやしたー！明、亮、同時指名だよー！」

おつと、どうやら早速俺らに指名が入つたらしい。あ、ちなみにメルトの人間界での名前は亮にした。

さて、お客さんはどんな女性かな？

ピチピチギャルが良いなあ。あと顔良し胸有りで個人的に貢いでくれて結婚したら子供は一人。

「一人共女の子で将来パパと結婚する」とか言つてくれるんだけど俺はクールだから、こりこり、離れなさいとか言つんだけど実は嬉しくて、でも仕事は不景氣。リストラされ家族とも離れ離れ…

つて、くだらない事考えてないで…まあ、お客さんはババアだよね。

現実はこんなもんぞ。

『「…」指名ありがと「」やこます』

「一人共若いのに頑張つてるから、指名しちゃつたわ」

『やー！

お前自分の顔よく見ろよ。猿だぜ猿！ しかも語尾に付けるなよ、つてゆうかお前そろそろ星になれるよ。死期近いもん、あんた。

つてゆーか臭いねん！

この香水、何？ マジ吐きそ…。悪魔の嗅覚は犬より良いんだからね！

メルトの奴も、もう何が何だか分からなって顔しててるから俺が稼がなくちゃな…。

『お飲みものはいかがですか？』

「いただくわ。何が良いのかしら？」

『この、血の池ブランデー、など、あなたにピッタリかと』

「あら、じゃあそれで」

よし、何とか一番高い飲み物を頼ませたぞ。

どうせホストクラブに来るババアなんて、ろくな事に金使わねえ奴
なんだからボツたくつたつていいのさ！

「ど…どひざ」

メルトが吐き気を抑え、ババアに飲み物を渡す。

「う…ん… 血の味」

てめえ何知ったかこいてんの？
血は俺ら悪魔の飲み物！！

まあ、その後適当に話を合わせているとボーイが俺のところに来た。

「明、他から指名だ」

『は、はい。助かりました』

ボーイと耳打ちを交わすとババアに頭を下げ、席を起つた。

「メティイー」

メルト…後はまかせた！

さて、俺を指名してくれた子は……ゲツ、マジ？

「こんばんわ、明くん」

…マジ？ 舞じゅん。

なんでホストなんかに？

あ、舞とは幼なじみで、前作のチョメティーでは暴力女として活躍した。

そもそも、『いつまはリョータって言ひ彼氏がいたのに。別れちゅうたのかな？

つてか正体バレたらヤバイよな、これ。

「写真見たら私の幼なじみと似てたから指名したんだよね。名前も偶然、明つて言つし…」

「ヤツと笑われた。もしやバレてる？

『思つて出のために記憶は消さないでくれなんて閻魔に頼むんじゃなかつた…。

「もつ、あんたはあいつと似てるから今日は付き合つなさい…」

バレてねえーー！

舞は頭良いけど、馬鹿だからな。

『今日は飲みましょーしかし、なぜあなたのような若い女性が一人で？』

『リョータつたらねえ！あいつが消えてからねえ！元気なくなつてねえ！私の事構つてくれないのーー！』

舞つて泣き上戸だつたんだ。つてか酒弱いなこいつ。

リヨータは前作で俺の喧嘩友達だつた。

何かと突つ掛かってきては喧嘩してたなあ。

۱۱۱

舞 リョータ ゴメンな。

『舞さん、元気出してよー。あいつって奴はきっと、いつも監を見守つてますよ』

「うん…グスン」

『 せ、あなたにこんな所は似合いませんよ。お勘定はいりませんから、リヨータくんの所に行きなさい』

「… そうだよね、あいつは馬鹿だけど良い奴だったもん」

馬鹿は余計だ。

「ありがとう。ご馳走様」

『はい。お客様お帰りでーす！』

ふう、何とかバレなかつたな。

(…………あれ？なんで私の名前知つてたんだろう？…………まさか……そ
んな訳ないか。あいつ……明は今頃魔界にいるんだもんね)

-----。

「やあ……気持ち悪い」

うわ、メルトつたらすっかりやつれてるよ。
しかも顔中にキスマーク。

頑張つたな、メルト！

48

「君達、お疲れ。今日は上がつていいよ。また明日な」

『はい、お疲れっす！』

よし、逃げよ。

「メテイー……魔界に逃げるぞ」

メルトの呪文で一瞬で魔界に。帰つて早々、メルトはベットに倒れ
込んだ。余程辛かつたのだらう。

『あれ……？メルト、ネックレスなんてしてたっけ？』

メルトは首に銀色のガーネイルのデザインが入ったネックレスをぶら下げていた。

「ああ、さっきのババアがくれたんだ。何でも、一千万で買ったつて言つてた。それって凄いのか？」

うん、凄いよ。人間界の金銭感覚は分からぬメルトには理解不能だろうけどな。

…にしても、本当にろくな事に使ってねえな。

ネックレスが一千万？

悪徳商業に引っ掛かっちゃったんだな…。

「これでガーネイルが召喚できるってババアが言つてた。いいもの貰つたぜ…」

いや、それ絶対ウソだよ？

人間はウソつきな生き物なんだよ！？

まあ、とにかくもう寝るか。メルトはすぐに安らかな顔で目を閉じてるし。

舞、リヨータ…それから皆。俺は元気にやつてるよ。

お前らに何かあつたら、どこでも俺は飛んでいくからな…。

リプレイ第四話～スネーク・アイ

悪魔との戦闘も無事やり過ごしたと言つても、まだ油断はできない。

各個人別にさらに能力に磨きをかける事にした。

大樹は猛勉強中。牛乳ビンの蓋みたいなメガネをかけ、打倒悪魔と書かれたハチマキを巻き、必死で遅れを取り戻そうとする姿はクラスで浮いていた。

もうツルツルに滑つていた。

皆の　ああ、こいつ痛い子なんだなあ　と訴える視線が何とも言えなかつた…。

とは言え、大樹が漢字を読める様になれば鬼に金棒。
悪魔が来ても恐くはない。

今日は日曜日。学校も休みだが、大樹は家で勉強してるだろう。

愛はと言つと…

「譲君～見て見て！」

ジャーンと目の前に現れましたよ、こいつはあれから俺の部屋に住み着いている。

『おう、米洗つてくれたかうおおおお？』

『いっは人間界の事をよく知らないのも分かるよ？』

食べ物だつて違うもんね。

でもね…

『なんで米が泡だらけ？』

「え？洗つてくれつて言われたから…洗剤で」

痛い子がもう一人いたよ。

『もういい。俺がやるからあつち行つて』

相変わらず俺は施設生活。
両親に捨てられたからな。

でも、この一年間で施設の人と大分コミュニケーションが取れる様になり、今では、煮物やら野菜やらの差し入れがもらえる様になつた。

……そうだ、まだ冷蔵庫に差し入れが残つてたな。

米はもう使えないし、なんとか食えるものを…

はい、冷蔵庫空つぽ

『愛ちゃん？なんかね、冷蔵庫空つぽなんだけど…？』

「あ、おいしかったよ」

全部食いやがつたこいつ。
つて言つてもたいした量はなかつたんだが…。

バイトの給料日まであと一週間もあるのに…。

まあ、初めて俺が作つた料理を出した時に美味しいぞうに食つてたからな…。

きっと天界の食い物なんて味氣無い物ばかりなんだろう。

施設とは言え、食事は自給自足。俺の手料理を誰かに食わした事はなかつたから、美味しいと言つてくれたのは嬉しいがね。

「でも なべ つてのはダメねあれ。硬くて食べられたもんじゃないわ」

こいつ差し入れの煮物を入れて保冷しておいた鍋も食おうとしたのか…。

はあ、もう昼時か。腹も減つたし今日は外食するか。

愛と初めて外出するけど大丈夫かな?

『愛、人間の姿になれ。外出掛けのぞ』

「はあい」

光に包まれた愛は人間の姿に。と言つても姿形は変わらない。羽が

消え、人間の誰からでも見える様になつただけだ。

私服は…まあセンス良い方かな？　さつき雑誌読んでたからそれを
「コピーしたんだろう。

天使の力って都合良いな。

『愛、あんま人間離れした事すんなよ』

「大丈夫ナリ！」

すげえ不安。

施設から外出許可を得て、自転車にまたがる。

「これ乗るの初めてなんだけど…」

『ああ、二ヶツは俺も初めてだが…まあケガしたって慈悲の能力で
直せるだろ？』

「慈悲の能力は自分には使えないの…」

以外な所で新事実発覚！

『まあ、大丈夫だつて、行くぞ！』

施設から街まで自転車で10分。ぎこちない運転ながらも無事到着
だ。

「飛んだ方が早いね」

「うるせえよ。

俺は飛べねえんだから文句言いつな。

学生の財布に優しいファーストフード店、マックでハンバーグをパンで挟んだものを食う。

『いただきま～す：ん？ 食わないのか？』

愛を見るとさつきから一口も食べてない。それどころか口に運ぼうともしない。

『どうした？ どうか悪いのか？』

「美食家の私からしてみればですね」

なんかハンバーガーで語り出したよ。

「ボリュームが足りない」

味より量か！

『仕方ないなあ… 店員さん、メガマック下さい』

「かしこまりました。メガマック入ります」

メガマックとは、通常の約二倍の大きさ。これならボリューム満点だろう。

「メガじゅ甘い」

いつから食いしん坊キャラになつたお前。

「ギガマッ で！」

ギガ來た——！

「かしこまりました」

あるのかよギガ。

これはタワーですか？

みたいな感じで運ばれてきたハンバーガー。

これには愛も満足してくれたみたいだ。

店中の注目を浴びながら、結局残さず食べちまつた。

あれほど立つなつて言つたのに……やっぱ無理か。

「『じゅわつとま 次はテラマッ に挑戦したいわね』

財布から断末魔の声がするよ……。

「譲君！ あれなに？」

『ん？ どれ？』

「マッキューを出た時に愛が上を見上げて言った。

視線の先には、屋根の上に馬鹿でかいボーリングのピン。

あ、ここボーリング場だね。

『ここには球を転がしてピンを倒して、そのスコアを競うゲームみたいなもんだ。行ってみるか?』

「うん!」

そつか、天使は人間界は知っていても、実際にやつたりはしないんだな。

愛にとつては普段俺が何気なく遊んでる物がどれも初めてで楽しいんだろうな。

-----。

『どうだ、愛?ボーリングって楽しいだろ?』

「うん でも私、譲君に比べるとへタだよね...」

『俺とはやつてる回数が違うから仕方ないって!それに、ハイスクアが50の人なんていっぱいいるから』

「.....それ嫌み?」

愛はボーリング初経験だから3ゲームやつてハイスコアが50でいいじけている。

ストライクもスペアも取れなかつた。

まあボーリングを上手くなるには、とにかくたくさんやる事だ。ゲーム数を重ねていけば誰でも上手くなるさ。

ボーリングは経験。

ちなみに俺は男友達と来る時は最低10ゲームは投げる。

そんな事をしようぜやつてもんだから、利き腕じゃない左でもフックボールを投げられるようになり、ハイスコアは202だ。

今も3ゲームの平均スコアが150を上回つてゐるから、愛は自分に自信を無くしている。

もつと楽しませむはずだつたんだがなあ……。

「譲るよー絶対 破壊能力 使つてやるよー?..」

使つかよ、そんなの。

もし使つたらピン粉々じゃねえか。

愛は負けず嫌いだからな……ボーリングは樂しくやるのが一番なの。

「おこおこ、このローン汚ねえなー」

「まあいいじゃねえか！とにかくやるつぜー！」

「うわ……隣のレーンにヤンキー一人組が来ちゃったよ。

B系のダボダボのズボンにあきらかにサイズのでかいシャツ。キャップ、バンダナ、グラサンで完璧ですよ。

でも男一人つて痛いよ

「おらあー！」

「こいつら…

「なんだよ……ストライクの音がいまいちだな……」

上手い…。

だが、マナーが悪い。

お前ら未成年だろ。煙草なんか吸いやがつて。

しかもちゃんと火い消せよ。ってか吸い殻が灰皿からこぼれてるから。

「ねえ……もう辞めない？なんか隣の人達ウザいから私キレイそうだよ

…」

可愛いいげな声で言つても内容恐いんだけど…。

『そつだな。これ最終フレームだし。あ、次俺の番か』

1-1ポンドの球を持ち、中指と薬指を穴に入れ、目線はピンではなく、手前のスペットを見、神経を集中。

隣の奴らに俺の自慢のフックボールを見せてやるぜ。

…と、投げようとした時、隣の奴が先に投げやがった。

「こいつら…ボーリングのマナーも知らないのか？」

隣同士のレーンで、投げる位置に同時に構えてしまった場合、右のレーンの人には投球権を譲るのがマナーだ。

「ん？ 譲に譲る…？
上手い…！」

…はい、滑りましたあ。

ツルツルツルでござります。

まあ…皆もボーリングをやる時は注意してね

「おい、隣の女のスコア見ろよ。ハイスコアが500って…」

「ブツ…可哀相だから笑つなよ」

その声はもぢろん愛の耳にも届いた。
「こいつら…もう我慢できねえ…！」

『おい！あんたらいい加減にしろよ』

俺はヤンキー二人組に絡んだ。

「ああ？ んだよテメエ！ 表出ろや！」

さぞかしじ立腹のようですね。

『フツ、ここはボーリング場だぜ？ ここは一つ、ボーリングで決着をつけよ！』

「…ハ？ ……ハハハハハ

俺の交渉に最初はア然とした表情を見せたが、態度は一変、次は大笑いへと変わった。

『おい、俺らマジ上手いぜ？ 見てただろ？』

『ああ、君ら得意そうだけど俺も自信があつてね』

『ま、良いけどね。ただし、負けたらその可愛い彼女… 今日一日俺らの命令に従つてもらうよ？』

ひええ～なんて嫌らしい。

つてか何このベタベタな展開は…。

『…譲君、もし負けそくなつら能力使って良いからね？』

いや、ボーリングに関しては自信がある。能力になんか頼らす…

『守つてみせるさ』

「守つてみせるぞ… だつて！ プフ。 愛ちゃん？ 君もこのゲームに参加するんだよ？」 「対一だよ」

「…マジですか？」

『あ… 愛？』

「あ… アチキも！？」

「一投交代でスコアが高い方が勝ちね ルールは簡単、ゲームスタート！」

そう言つと勝手にヤンキーが投げ始めた。

「しゃああー！ ストライクーー！」

先制されました。

「ビ… ビウシヨウ…」

『大丈夫だ愛！ 一投目はお前が投げる。 残つたピンは俺が全部倒してやるー！』

「う、うん」

自信なさげに投げた愛のボールは見事にガーター。

「ヒヤハハ、おいおい大丈夫かよー」

今に見てろよヤンキー共。

俺が全て倒せばスペアになる。

10番ピンに向かって一直線に放たれたボールは、ピン数メートル手前で、その回転力で曲がり、1番ピンと3番ピンの間に命中。

快音と共にピンが弾け、一本も残さず、全てを倒した。…これでスペア。俺達も負けていない。

『いいか、愛。スペアの後はいっぱいピンを倒すんだ。ガーテーだけは勘弁してくれ』

「よし、分かつた。」

自信満々に投げた球はガーテーの溝に一直線

コイツ何も分かつてねえや

「シールド！」

ガン

コイツ、ガーテーに落ちる手前でシールド張つて球の軌道変えやがつたあー！

「慈悲の能力は回復だけじゃなくてバリヤーも張れるのよ！」

完璧なルール違反

ヤンキー達も首かしげてら。

その後も順調にスコアを伸ばすヤンキーに対して、俺達も食らい付く。

後半の5フレームから變もコジを掘んだのか、シールドを使わなくともピンを倒せるようになつた。

現在9フレーム目。

わずかに俺達がリード。残り後2フレーム。このまま逃げ切りだ。

「さあて、本気で行くかなーー！」

そろそろ火が点いたのか、ヤンキー達はここでストライクを取る。

俺達も負けじとスペア。

運命の最終フレーム。

ヤンキー達はスペアを取り、ボーナスとも言える二投目で10ピン倒し、スコアが158となつた。

俺達のスコアは9フレームを終わり140。

しかし、スペアを取つてるので、勝利条件は、俺がスペアを取り、

三投目に愛が一本でも全部ピンを倒してくれれば…

愛ヒーパンの計算は複雑で集中もできないだろうから、あえて黙つておぐ。

『氣樂に投げる』

「うん」

そして第一投目。

ストレートに投げたボールはシールドを使わずに一番ピンに命中。

……しかし

「ヒヤハハハハハハハハ！どうすんの彼氏！スネーク・アイだよ！」

そう、これは俺が想像していた最悪のパターン。

スネーク・アイとは、7番ピンと10番ピンが残ってしまい、スペアを取るのは極めて困難だ。

一番奥の両端のピンが蛇の田に見える事からスネーク・アイと呼ばれている。

それより最悪なのがスコアだ。

140 (9フレーム) + 8 (スペア) + 8 (10フレームの一投目)

= 156

111で1ピン倒しても、ヤンキーの158には負けてしまつ。

ど、どうする…。いつなら破壊能力使うか？いや、いくらなんでも一般人の目の前でそれはマズイな。

…愛はバンバン使ってたけど。

いつなら奥の手だ。

「う…うめん」

『気にするな。今日初めて一番ピンに当たったじゃねえか。次はストライク取れるよ』

「おおお、次はもうないよ！俺達の勝ち決定じゃん？」

『バーカ、あと3ピン倒せば俺達の勝ちだろ？』

『3ピン、見えてる？君らのレーンには残り2ピン。しかもスネーク・アイ。どうやって勝つんだよ』

『いつやんだよ…』

俺が投げたボールは勢い良く……

放物線を描き隣のレーンへ

『しゃああー3ピン倒れた！俺達の勝ちだ！』

『てめえざけんなよ！ボーリングのマナーも知りねえのかよーーー！』

『マナーを知らないのはてめえらだらうが！！』

俺の怒鳴り声で一瞬ひるんだヤンキー。

『いいか、ボーリングは他のお客さん迷惑がかかるような事はしちゃいけねえんだ。』

俺が隣のレーンに投げた時、あんたら迷惑だつただろ？

その気持ちをずっとあんたらは他の人達に味わらせてたんだぞ？』

『ぐつ…負けたくせに説教かよ』

『じゃあよーく見てる』

俺はボールを持ち、一番端っこに立つ。

10番ピンの前から投げたボールは対角線を描き、7番ピンの左側のガーテーへ。

しかし勢い余つて、溝からはい上がったボールは、7番ピンを弾き、90°の角度と飛んで行く。そのまま10番ピンも倒した、スペアだ。

『見たか？これがスネーク・アイ攻略法だ』

危ねー！

カツ「付けちゃつたけどスネーク・アイ取れる確率は五分五分だつてのに。」

まあ、普通は50%で倒せる奴なんていないけどね。

ヤンキー達はア然としていた。スネーク・アイを倒せたのを見た事がなかつたんだろう。

『愛、まだ三投目が残つてゐる。次はストライク取れるよ』

俺は一ツ「コリ」と微笑む。

実際、1ピンでも倒せば勝ちだが……

愛はこの一投で初めてストライクを取れたのだった。

-----。

「あ～楽しかつたね」

『そつだな。しかし、お前の罰ゲーム、最悪だぞ、あれ……』

「え？ そつ……？」

『あんた達がピンで私がボールね とりやああー…………あいつ
ら絶対トラウマになつたよ』

「乙女が体を賭けたんだから当然でしょ…」

まあ、確かに。

でも、いくら女の子って言つても愛は天使。

元々の潜在能力は人間と比べ物にならない。

ヤンキー達も可哀相に。

女の子に喧嘩負けましたってなつたら恥せらしも言ひトコだな、うん。

「人間界つて楽しいなあ」

『俺も最近、それに気付いた』

「譲君はずつと居るのに?..」

まあ、一年前までの俺の暮らしなんてクソだけどな。

愛に救われて…大樹を初め友達ができる…

この一年間は、何もかもが楽しかった。

友達と遊ぶのがこんなに楽しいなんて知らなかつた。

だから初めての事で、はしゃぐ愛の気持ちも分かる。

愛に助けたから、チーム内で唯一の攻撃手段を持つ俺が、
今度は愛を守つてみせよつ。

「私、ずっと人間界に居たい！だから、悪魔なんかに譲君を渡してたまるかー！」

ハハハ、頼もしい天使だこと。

『帰るぞ、乗れ』

「うん」

今日は俺もはしゃぎ過ぎたな。疲れちまつたぜ。まあ、楽しかったからイイや！

「譲君……」

『ん？…どうした？』

「晩ご飯…何？」

…しまつたあ！

冷蔵庫は空っぽだった！

せっかく和やかな感じだったのに、結局はこんなオチかよ。

『愛、戻るぞ！晩飯のおかず買わないと…』

「え？もう9時50分だよ？スーパーの閉店まであと10分！」

『間に合わなかつたらおかずなしだ！』

「それはヤダア～！」

『だあーー間に合わねえー飛べ、愛ー。』

「ラジヤーーー！」

愛がいる限り、疲れそうだな。：まあ、暇にはならんだろうな。

チョメテイー第四話～僕とメルトは「ひつ」出合った

「…………

『「ひつした、メルト?出だしからボーッとしてる』

メルトは一段ベットの下で朝からボーッとしている。

寝起きは良い奴だから頭が回らなって訳でもなさそうだし……。

ちなみに俺は一段ベットの上からメルトを見下す体制だ。

「いや……メテイーと初めて会った時のコト思い出してた

もう、メルちやんつたら

「ひつ恋入同士の雰囲気、嫌いじゃないわよ

「…………キモつ」

素で「むかが、つまらなくもシッコ」はくれ。

しかしあ、メルトとの出会いか……。

あの時の俺は魔界に来たばかりの右も左も分からぬ奴で、メルト
がいないと大変だったのを覚えてる。

「あ、回想シーン入るの?」

『うん』

「じゃあ俺視点ね」

『ダメ。コメディーじゃなくなる』

「アラームラディ…」

『好きにして下せ…』

はい、入りました回想シーン。

俺にコメディーの視点は場違いだと思つが聞いてくれ。

幼い頃から成績優秀。難しい呪文も使いこなし、その中でも爆発系アラームなどの呪文をメインに使つてきた。

わずか7才にしてデビルAランク入り。

こつしかそう呼ばれるコトにも慣れる。

『天才』

その反面、努力をしなくても人並み以上なコトができるしまう俺は、周りから冷めた子だとも言われていた。

友情など、くだらない仲間意識は仕事上、命取りになると本で読んだため、他人との関わりを避けて来た。

18才を迎える、デビルAの頂点に立つ。もはや大人でさえも俺の実力を認めていたはずだ。

だが、無愛想な俺を祝福してくれる奴はいなく、むしろ妬まれる立場。

それは俺が望んだはずの事。なのに、なぜか淋しかった。

今日も仕事を終え、家に帰ろうとする、目の前の人間界のワープゲートから一人の悪魔が出て来た。

最初見た時は冴えない奴だと悟ったし、不審な行動もとる。

まるで、初めて魔界に来た人間の様な動き…。

そいつがメディーだつた。

『うひよお～スゲエ～こ～が魔界かあ～…ん?』

(お…～やつと俺が出てきたか)

「…あ」

『うるさい田が余りてしまつた。』

『あなたもサターンなの?』

俺がサターン? ううつ、悪魔のくせに俺の口と知らんのか?

(こやあー)の時は階級があるなんて知りなくて

『俺はデビル△のメルト。あなたは?』

『サターンのチョ・メティード』

『ハア!?

』こいつサターンなのか?

『じゃあ、ちよつびじー』

『ねむ、ちよつびじーだー……何が?』

ランクを昇格させるには、そのランクの相手の血を奪つ事が条件だ。

デビル△からデーモンを飛ばし、一気にサターンになれるチャンス。

見たところ、ゴイツから魔力のかけらも感じない。

『奪血の礼……お前向かって……つかわー!』

『奪血の礼……お前向かって……つかわー!』

俺は補助呪文で、爪の長さと固さを強力に増すと、それでメティーに斬りに掛けた。

ギリギリで避けられたがな。

(この時はマジ死にかけたからなあー)
(…スマン)

「呪文使わないんですか？あんまナメたらマジで殺しますよ」

『何言つてんだって！待てよー。』

チツ……サターンクラスのへせにて逃げ腰かよ。

つて事は…

「サターンは嘘なんだな？今なら許す、正直に言え」

「ういう輩がいるんだよ。

この前も俺は『デーモンだとか言つてた奴に奪血の礼を交わしたら、
デーモンは嘘でしたとか言われたしな。

申し込まれたら必ず受けなくてはいけない。

そのかわり、申し込まれたら、相手を殺しても文句は言われないと
いつも。

ランク昇格は己の力と相手の力の差を見極められる能力。

命の損失の代償を背負うものだ。

『よくわかんね。でもケンカなら買ひぜ?』

やつとやる気になつたのか、目付きが変わつた。

だが攻撃は、何の変哲もない、普通のパンチ。

…のはずだ。

拳から魔力が感じない。

これは普通のパンチ。

なのに…

なぜこの俺が避けられない！？

『オラララララ！ダリア！トリアア！フウ、疲れた！』

「グッ…どんなトリックを使った？」

（人間から悪魔になるによつて、筋肉が増強して、体が軽くなつた気がしたから強くなつたんだね。解りやすく例えるなら、超クソ重たい重りが外れたつて感じ）

くそ…さすがサターンだ。

『魔力？今のは普通のパンチだけど？お前弱くね？』

やはり普通のパンチか。

呪文を使わずにこの強さ。

だが、見たところ同年代。なのにこの差は…

負けたくない

「アラームラディー！」

アラームラディーは爆発系最大の呪文。

俺の使える呪文の中でも最強の呪文だ。

ドバーン…と周辺に巨大な爆発が起ころる。

砂煙が晴れると…

「危ないじゃろ！バカモン」

なぜか閻魔様がいて、メティーをかばっていた。

「間一髪セーフじゃつた…ん？あ、ヒーローは遅れて登場するもん
だろ？」

今、閻魔様言い直した。

「説明が必要だな、メティー、メルト。ついてこい」

そして呼ばれた俺達は、メティーが人間界で育つた事など、秘密事
項を教えられ、こうして運命共同体になつた。

『あ、終わった？』

「ああ、まさに『メティーだつたら？』

『ドコが！？』の話のドコに笑える要素があつたの…？むしろバッ
クボタンで戻つた読者の方が多いよ？』

「ムツー！…じゃあメティーの人間時代の話してみるよ」

『フツ…お安い御用だ』

あ、回想シーン入ります。
(分かってるよ)

田覚ましの音を一切無視。自然と田が覚めるまで寝る。

時計の針は午後4時。

遅刻どころか、帰りのH.Rが終わる時間である。

『お寝坊さん』

いつしかそう呼ばれる事にも萌える。

(お前バカにしてんのか？)

では次の日。

昨日は軽く1-5時間は寝たはずなのに、夜また寝る。

今日は彼女のモーニングコールで田を覚ます。

(ホウ、メティーは彼女がいたのか)

「家が近ければ毎日起きて元気に行くのになあ……」

そんな事で悩んでくれる彼女に、朝起きられない事に罪悪感。

(いい彼女じゃないか)

そして支度を整え、家を出ると、女が待つてる。

俺と一緒に駅まで行きたいらしい。

(え……？ 彼女の家は遠いんじゃ……)

『テメエ わざわざ来んなって言つただろーー？』

(……あ、付き纏われてるのか)

「だつて一緒に行きたいんだもん……」

『仕方ねえな……ほら、手』

(……ほ？ オマジ…)

そして女を駅まで見送る。

そして今田は地元の女子高で学園祭が行われててる事を思って出る。

『フツ……あこつの方にも顔へりこ出してやるか』

(お前何人彼女いんだよ！！つてか学校行けよ！)

女子高の学園祭が平日でやるのは、生徒だけの学園祭。つまり、一般公開はしないのだ。

その理由は女子担当の男を校内に入れないと。

しかし、生徒全員の署名運動のおかげで俺だけ入園が許可される。

そして、歩く度、目が合つ度にメアドを聞かれてもう大変。

そんな俺を良く思わないのが幼なじみ。

独占力が激しいツンデレ系だ。

『よお』

俺が挨拶したにも関わらず…

「何しに来たの？」

と、冷たい扱い。

しかし、署名運動を立ち上げたのが、実はコイツなのだ。

さしづめ、演劇部でヒロイン役をやる姿を俺に見て欲しいのだ。

さうして、この学校には俺の妹もいる。

クラスの出し物で『カレーそば』という前代未聞の挑戦クラス。

しかも食べに来てと言われたから質が悪い。

ま、普通の女からの誘いなら断つているが、妹のためなので仕方なく行つてやる。

ドアを開けると、女の子全員の視線が俺に注がれる。

「あーお兄ちゃん」

俺に気付いた妹が駆け寄つてくる。

カレーそばを渡され、席に座り食べてみるが、案外うまい。

完食後、退室。教室からは《マジ格好イイーー》とか《超好き！明日告白するからー》など戯言が聞こえるがあえて無視。

しかし、どうやら教室に

携帯電話を落としてしまったみたいだ。

急いで取りに戻ると、妹が質問攻めにあつていて。

《彼女いるのー?》とか《好きなタイプはー?》など、俺に関する事ばかりだ。

だが、当の本人がいるのに気付いていないみたいだ。

『あの…携帯忘れちゃつて』

「…………」

やつと俺がいる事に気付いた女共は、《キャー、そつさの事聞こえ
ちやつた?どうじよつ...恥ずかしい...》とか思つていいに違ひない。

(あの...メテイー?)

そして複数の女に引っ張り廻の俺。

(おー!メテイー!)

しかし運悪く、現場にツンデレ幼なじみが登場。

(もついい。辞めろ)

泣きながら走り去る幼なじみを捕まえ一人はそのまま.....

(アラームラメイ...)

はい!メンなさい。

回想シーン強制終了。

「...で、どうから嘘?」

『次の日へ辺りかな』

「ま、全部嘘じやねえか！」

リプレイ第五話～フレイクショット

今日は、この前回来たボーリング場にまた来ている。

理由はビリヤードをやりにきた訳だ。

ま、同じフロアにビリヤード台を発見した愛は、どうしてもやりたいと黙々をこねたので連れて来た。

どこのボーリング場にも大体ビリヤードはあるからな。

それにしても、最近は愛のわがままに付き合つのが多くなつてきたな…。

ちなみに今回は大樹も一緒だ。

何でもコイツは、あれから猛勉強のおかげで全国模試で五本指に入る程頭が良くなつていた。

本人いわく、読めない漢字はないらしい。

完璧だよ、大樹くん！

さらにさらに、看破能力に応用編と言つた、必殺技まで編み出したらしい。

ホント、頼もしい仲間だこと。

ビリヤード

ルールは簡単だ。

基本、球は白い球をキューと呼ばれる細長い棒で打ち、球に当て、四隅と長方形の台の真ん中に開いた、計六つの穴にボールを落としていくゲームだ。

今回俺達がやるのは、《ナインボール》と書いて、1から順番に落としていき、最後の9番ボールを落とした人が勝ち。

俺もビリヤードは経験が少なく、愛はもちろん初めてやる。

大樹はやたら自信満々だ。

「じゃあいくよ。まずはブレイク・ショットか?」

ブレイク・ショットとは、最初に白い球で、指定の位置に定められた9個のボールを弾く事だ。

この役目は大樹が勤める。俺達がやつても、そんなに弾けそうにはいからね……。

パン!

快音と共にボールが弾け飛び、5、7番ボールがポケットに落ちた。

大樹キモいぐらい上手いんだけど……。

ボールを落とせたら、もう一回打つ事ができる。

最初は1番ボールからだ。

なんかもう普通に大樹は次々とボールを落としていく。

俺達に順番が回ってこねえよ。

つかキモいよ。

「ああー！大樹君能力使つてるうー！インチキだインチキ！」

「うわ…マジだ。目が赤い。

「フフフ、看破能力を使えば台にこの角度へボールを打ちなさいと光が浮き上がるのさ」

ズリイよテメ。

「ハハハ、クッションボールを使えば僕は無敵だあ！」

クッションボールとは、壁に当ててボールを跳ね返し、ターゲットボールに当てる事だ。

これが普通は難しい。

どの角度で当てれば良いのかが掴めないからだ。

しかし大樹は能力で入射角を看破している。

オマエ、ゲームで能力使つなよ。

「こんな難しい角度だつて…ほうー。」

クッションボールでボールに命中。吸い込まれる様にポケットへ向かう…が、

「シールド」

はい、愛のシールドでポケットが塞がれましたあ！

「…なつー。」

「私も応用編でこんな事ができるのよ」

ポケットにはバリヤが張られている。これじゃ穴に入るわけがない。

つか、オマエら《能力》を何だと思つてんだよ…。

「もおー、能力なんか使わないでね」

愛がブンブンという擬音が似合いそうな感じで大樹に説教している。いや、お前も能力使うなよ。

「ハハ、ゴメンゴメン。能力を使わなくともビリヤードならやつた事あるから、ある程度なら教えられるよ」

と、ゆーわけで。

大樹のビリヤード教習が始まった。

構え方、力の入れ具合など、基本的な事は教わった。

「その調子だよ愛ちゃん！」

愛は「ツを掴んだのか、短時間で見事な成長を見せた。

「それに比べて…」

「譲君は…」

わーい、二人の視線が痛いよ

『仕方ねえだろ、人には向き不向きがあるんだよ！』

止まっているボールを棒で突くだけのゲームなのに、なぜか上手くいかない。

手前の白い球を奥の球にすら当てる事ができない。

『くそ…ボールがもつと大きければなあ』

「あ、じゃあ愛ちゃんの胸で練習してみれば？」

「やだあー それセクハラよ大樹くん シールド 」

人一人スッポリ収まる大きさの半球のシールドが大樹を閉じ込めた。

「出れねえーーー！」

『ハハ、変な事言つからだよ。それに愛の胸だつて突きやすい程大きくな……』

あ、

……やべえ。

「シールド」

……出れねえ——！

-----。

その後、何とか愛の機嫌を取り戻した俺達は、ようやくシールドから出られる事ができた。

うん、これは禁句にしどい。

「さて、今日もたくさん遊んだし……」

グイッと愛が大きく伸びをする。

「やつやつ修業しどいつか？」

いきなりか！

「え？僕ずっと勉強してたから今日はもつと遊びたいんだけど…」

「ダメ！いつ悪魔が来るか分からんのだよー…？」

まあ…確かにそうだけど…ねえ。

『修業つつたって、何やんだ？』

「譲君は破壊能力のコントロールね。大樹君は…自分で考えなさい」

適當…！

ま、能力のコントロールは大切な。

力を抑えないと無駄に俺の体に負担がかかるからな。

「あ…じゃあ僕は能力に磨きかけてくるね」

そう言って大樹は帰ってしまった。

ま、真面目な大樹に限ってサボりはしないだろう。

残された俺と愛は近くの公園に来た。

「じゃあまずは、この空き缶の真ん中だけを破壊して

公園のベンチに縦に並べられた三つの空き缶。

『真ん中だけ……か』

精神を集中……。力を抑え、ターゲットだけを黙視。

『能力発動』

みるみる俺の瞳は赤くなる。狙いは真ん中の空き缶一

／パン／

アルミの缶があつという間に弾け飛ぶ。

：前の空き缶以外。

「まだ力をコントロールできてないね。もし後ろにいたのが私達だったら、巻き添いを喰らつてるトコよ？」

失敗。

確かにこの能力は危険だ。愛や大樹に危害を及ぼす可能性だつて充分にある。

『もう一回だ……』

-----。

すっかり日が暮れてきたな。もうクタクタだよ。

何とかコントロールはできるよつになつた。

あの後も、揺れたブランコの上に置いた空き缶で、動くターゲットの破壊など、公園にある遊具で効果的な実戦をさせてもらつた。

そのおかげで今日は充実した一日だったのではないだらうか？

『もう10時過ぎか、そろそろ帰るか』

「そうだね、お疲れ様」

愛と公園を出ようとすると、向かいの店から大樹が出てきた。

手に大量の景品を持つて。

大樹が出てきた店…『パチスロ ジャンジャン バリバリ』。

「ハーハッハ！僕の看破能力を使えばどの台が出るか一瞬で分かるよ……あ」

へえ～ 僕が修業してる間にパチスロかあ～

しかも、またくだらない事に能力使つたね君。

『破壊能力』

これで大樹の持つていた景品が木つ端みじん

「うん、コントロールできるよつになつたね

『だろ？』

「だろ？…じゃないよー…ああー今日の勝ち分があ…」

ハツ、高校生がパチスロなんかやるんじやない！

チョメテイー第五話～今回笑いの要素ゼロだぜ

今更言ひのもなんだが…

氣になる…

氣になりまくる。

俺の父さんは名高いサターンと聞いたが、どうゆう悪魔だったんだ
ね？。

なんで俺は未熟児として生まれ、人間界に送られたのだろう。

氣になつて夜も眠れねえぜ。

よし、いひゆひ時こそ閻魔様に聞きに行こう。

『閻魔様！』

深夜、だといつのに閻魔様の部屋を訪れてみた。

「ふあ～…何？こんな時間に」

閻魔様は寝入る所だつたようだ。見かけ十歳くらいの容姿にパジャマ姿の閻魔様は、ちょっと可愛かつた。

「ワシが完全に寝て いる所で起こしたら打ち首ものじやぞ？」

サラつと恐い事言わないで下さい。

つてか小学生みたいな顔で一人称が『ワシ』。

さらに語尾に『じや』など、顔に合わない事を言つ。

『あ、すいません…。ちょっと、父上と母上の事で気になつて…』

生まれてこの方、一度も両親の顔を見た事がない。
物心が付いた頃には、既に人間として育ち、自分が悪魔と気付かなくくらいだつたからな。

「つ…メディーの親…」

閻魔様はかなり困った顔をして いる。

辞めてよ、なんか聞くの恐いじゃんか。

「メディーももう大人だしのぉ…言つてもいいか

『クリ…。

「まず、これがメディーの父親じや」

閻魔様の右手から、ブンッと音と共に、映像が出てきた。

そこには一人の悪魔。

「こつつい顔に鋭い目付き、武将ヒゲが似合つダンディーな印象。

この人が：俺の父親。

「で、こつちが母じや」

今度は左手から映像が飛び出す。

優しい顔立ちで、シワが一切なく、まだ若い。

細い目で常に笑顔を保ち、なんでも平気でこなしそうな印象。

そして……

母親は……人間だった。

「そう、父は悪魔。母は人間。だからメディーは未熟児として生まれたのじや」

だから生まれたての俺には尻尾や翼がなかつたのか。

「もちろん、これは魔界の撃破りじや。なぜ二人とも死んだか、気になるじやろ？教えてやるわい」

あ、回想シーンに入るぞ？

（そのネタは前回俺がやりました）

メディー父親、メディー。サターンとして数々の伝説を残した最強の悪魔。

しかし、あることが、メディーは仕事で命を奪いにいった人間に心を奪われてしまった。

その女性こそが、メディーの母親、沖本 明美さん。

重い病にかかりてしまい、一年間の入院暮らし。

その人生のペリオドをメディーが打ちに行つたわけじやな。

しかし明美さんには靈能力があつたらしく、メディーが鎌を振り上げた瞬間が見えてしまったのじや。

明美さんは、『これが私の運命』と、メディーにニッコリ笑つてみせたそうじや。

その笑顔に心を奪われたメディーは、命を奪う事ができなかつた。

それどころか、禁断の呪文で明美さんの病氣を治してしまつたのじや。

「うなればマディーは魔界から追われる身。

結局一人共、追つて捕まり殺されてしまったのじゃ…。

しかし、明美さんの死体を片付けようとした追つてが、何かに気付いた。

妊娠している事に。

悪魔と人間の子供。

それは人間界にバレてはマズイ。

その追つては、腹の中から子供を引き抜くと、魔界に連れて帰ってきた。

その子供こそ、マディー。お前じや。

姿形は丸つきり人間。

悪魔として育てても、自分だけ格好が変だと悟られるだけじや。

そこで、人間界に送つたと言つわけじや。

-----。

やつと真実を教えてもらつた。だが、なぜこんな結果になつたのか。

仮に、父さんがあの時、母さんを助けなければ、俺はこの世にいなかつた。

魔界の掟は絶対だ。

だが、両親を殺した追つてを怨んでいないかと言つたら嘘になる。

『誰が俺の両親を殺した…?』

「同じサターンのマルト。マルトの父親じや

メルトの親が俺の両親を殺したつて言つのか…?

「じやが、マルトは既に死んでいる。マディーとマルトは親友じやつたからな。同じサターンを殺すなど、辛い仕事を引き受けたのは、外ならぬマルト、自ら引き受けたのじや

…そつか。そんな辛い決断をしたんじや責められねえや。

メルトに当たつたつて仕方ねえしな。

『ありがとうござります。閻魔様』

俺は頭を下げる、トボトボと部屋を出て、おとなしく寝床に着いた。

…涙が止まらなかつた。

ロブレイ第六話「お疲れ様」が言いたくて

『お疲れ様でしたあ！』

「お疲れ！帰り道気をつけてな」

『ウツス！』

いやあ、今日も働いたなあ。

俺は学校に許可を貰い、生活費を稼ぐ為にバイトをしている。

学校が終わり、夕方6時～夜12時までの6時間労働。

バイトと云つよつ、仕事だ。

製品工場で働いていて、かなり給料が良い。

週に四日も入れば、生活費としては充分な額になる。

施設に入れる金はごく僅かだし、学費は家庭の事情から免除されてい。

よつて出費は食費だけで済むのだ。

愛に留守番を頼んでいるから、早速帰らなくては。

『ただいま……』

『ムニヤムニヤ……』

『おい、こんな所で寝てると風邪ひくぞ？…ヒアロンもつけっぱなしじゃないか…』

『……ムニヤムニヤ』

……起きない。

まあ仕方ないと、愛をソファーカラベットに運ぶ。

俺が家に着くのは深夜1時だ。無理もない。

とりあえず汗を流すためにシャワーを浴び、飯の準備に取り掛かるべく、台所へ向かった。

よしよし、ひやんと愛は俺が用意しておいた夕飯も食べたよつだな。

仕込みが済んだ状態の煮物を温め、白米のおかずにする。

派手な味はないが、疲労と手間を考えればこれがベストなのだ。

綺麗に平らげた後、食器を洗い、俺も寝床についた。

-----。

朝、充分な睡眠時間は取れていながら、学校のため重い瞼を懸命に開く。

『……ねみい』

睡魔に負けてポツクリ逝きそうになつた。

「譲君！朝だよーーー！」

『ぐはー..』

しかし睡魔は愛のジャンピングボディプレスによつて消え去つた。

「さ、学校学校」

『なんか今日テンション高いな』

「そりやそりや。今日はアタシも行くんだもん」

『そつかそつか。じやあサッサと準備して..ハアアー..』

「コイツ今なんて言つた?

学校に行く?

「早くう~遅刻しちゃうよ..」

時計の針は家を出る時間に迫つていた。
昨日の疲れからか、寝坊してしまつたらしい。

『やべー、早く行かなきゃ』

速攻で制服に着替え、鞄だけ持ち、勢い良く玄関を飛び出した。

「もつと速く走れないの?..

『俺は人間だ。お前みたいに飛べないの!..ってか着いてくんない

..』

遅刻ギリギリで間に合つた。結局、愛は着いて来てしまった。

『姿は見えないよ!..』

「分かつてゐるナリ!..

うん、すげえ不安だつて。

「おはよう讓君…と、なぜ愛ちゃん！？」

『おはよう 大樹。：なんか着いてきた』

「だつてヒマなんだもん」

ま、おとなしくさせとけば良いか。

大樹以外の人間に見えてないよね？

そんな不安を胸に教室を開ける。

すでに出席を取っているところだつた。

「木下……遅刻、ギリギリだぞ……ん？」

担任の野中先生。のなか教科は家庭科を教え、歳は30近いらしいが、全然若く見える。

落ち着いた茶髪を巻いていて、結構美人。男子生徒に人気高し。

でも性格はちょっと悪い。

そして忘れてた…

野中先生は…

「おい、譲。そこの可愛い子ちゃんは誰だ？」

靈感が最強に強かつた事に…。

「ほう、ここの子は天使なのか。こりゃまた珍しい」

「すういね先生！人間から見えないよ！」としてたのに

「私の靈感をナメるなよ。低レベルな靈！」ときだつたら除靈だつて
可能だ

ここは調理室。HRは中断し、俺、大樹、愛は野中先生に呼び出されたわけだ。

バレた事をヒヤヒヤしてた俺だったが、愛と野中先生はすっかり仲良くなり、心配してた俺がバカみてえじやねえか。

「譲もスミに置けないねえ。こんな可愛い天使といつしょなんて

「ホントだよ。譲君つたら毎晩アタシに色々な事を強制で…」

「何！譲君つてそんな人だつたのかあー！」

待てコラ。

変な事いうんじゃねえよ。

「まあ、愛は私が預かつてやるから。お前らは授業に戻れ

『あ、お願ひします』

まあ野中先生と一緒に心配ないな。俺のクラスの授業に家庭科はないし。つていうか、家庭科があるクラスは、ほんの一部。

よつて野中先生はほとんどがヒマで、調理室も独占している状態だ。

うん、心配しそぎは良くないな。

そんな安心感からか、疲労からか、授業中に睡魔がやつてきて、ポツクリ逝ってしまった。

「調理室から火災警報が出ました。生徒の皆さんは、待機して下さい」

そんな放送が入り、慌ただしく走る先生達。

そんな事が起きているなど知らず、俺はまだ夢の中にいた。

「『メンなさい…』

放課後、俺と愛は改めて野中先生に謝りに行つた。

「ハツハツハツ、気にするなつて。愛も反省しているいじだー…それより譲、仕事、遅れるぞ?」

ヤベツ、今日も仕事入つてたんだつた。

『あ、じゃあ俺帰りますーホントすいませんでした』

「気をつけたなあ」

「そ、先生。早くあの続きを…」

「ああ、分かつてゐるよ」

学校もギリギリ。仕事もギリギリ。

今日は疲れる日だつたなあ。

あー、愛の夕飯の支度してなかつた！

…怒るだらうなあ。

『ただいま…って何だコリヤアア…！』

酷く散らかった台所。

床に飛び散った卵に水に食器…。

「ムニャムニャ…」

そして、いつも通りソファーで寝ている愛。

『起きる愛…ん？』

テーブルの上に置かれた、なんとも形の悪いオムライス。

そこにはケチャップで丁寧に

《おつかれサマ》

と書いてあった。

『不器用なお前がよく頑張ったな

さしずめ、野中先生に教えてもらつてたんだろう。

火災警報機を鳴らしたのもこれが原因か。

愛の手に巻かれたバンソウコウ。

満足にフライパンも持てないくせに。

自分には慈悲能力が使えないくせに。

『オムライス……もう冷めてるじゃねえかよバカヤロウ……』

でも、こんなに温かい料理を食べたのは初めてだつた。

「あ……譲くん……」

『わりい、起こしてしまったか?』

「ゴメン……散らかしちゃつて」

『そんなの俺が片付けとくから、寝てて良いぞ?』

「アタシがいっぱい食べるから……仕事いっぱい入れたんでしょ……?
だから……ちょっとでも役に立とうとしたんだけ……余計迷惑かけち
やつたね……」

『気にすんなつて……』

「譲くん」

『うん?』

「……お疲れ様

『ああ、愛も……お疲れ様』

チヨメティー第六話／父が残してくれたモノ・前編

いやあ、前回は酷い目にあつたぜ。あれからメルトは二日二晩、熱にうなされていた。

相当あのババアの相手がトラウマになつたのだらう。

わて、メルトの体調も治つてきたし、今日は 能力者対策 に魔道具を買いにお買い物だ。

カマルト（大鎌）などは、呪文で 作る のではなく、呼び出すのだ。

譲の破壊能力の巻き添いを喰らつたカマルトは、跡形もなく吹つ飛んだので、代わりとなる武器の調達と言う訳だ。

そんな訳で、俺達は魔界の街に来ている。

もつぱらお^氣にこの店はここ、処刑堂。カマルトも処刑道具だからここで買った。

店内に入ると昼なのに真つ暗で数少ない蠟燭の光だけが唯一の明かりとなつている。

「まだまだあーこれからだあーー！」

店の奥からいきなり店長の極太い叫び声が聞こえてきた。

あつとまたやつてゐるんだろうなあ……

「特訓開始——まずは指立て伏せ——！」

「押忍——！」

『この店長はかなりのマッチョマニアだ。店員さんも全員マッチョ。と、ゆうか……マッチョしか雇わないらしい。

『あの……店長さん?』

「おおメーティー！ メルト！ お前らもマッチョになりにきたのか？」

違います。

『カマルトが壊されちまつてね。代わりの処刑道具を買いに来たんだ』

「何!? カマルトが壊されただと!? 相手は誰だ! ? そいつはマッチョか! ?」

マッチョから離れる。

「俺が鍛え上げたカマルトが壊されるなんて……まだまだ筋肉が足りないんだ——！」

いや、そこは関係ないだろ。

つてか、そろそろ店員さんも辛そうだぞ?

「よし、ちよつと待つてみ。お前ひ、指立て伏せは終わりだ

ホツ……やつと仕事してくれるか。

「最後に俺に勝った奴から仕事に戻つてよし

ゴクリ……三人の店員が生睡を飲み込む。

「今日の勝負は……竹の子マツチヨだ！」

何だそのゲームあーーー！？

竹の子一コシキジやないのか？

「こくべーーー！」

「こく押し忍ーーー！」

「せーの、竹の子竹の子マツチヨシチヨーーー！」

「ーーー四キイイイヤマーーー！」

「ンヒニコ四キイイイヤマーーー！」

「ーーー三ーーー四キイイ……ウツーーー！」

「氣合いが足りんーーー！」

びつやくらルールは竹の子一コシキと同じよつだ。
1から順に数えていき、他人とかぶらなことひこすの心理戦ゲーム。

ただ、かなり気合こが空回つし過激で「ヨシキヤマ」とか言ひりや
つてるよ……。

店員A、Bがかぶつてしまいアウト。店長から激が飛ぶ。

「貴様らは心を無にしていいー読まれないよつにするから駄目な
んだ！」ひから読めー」

…読まれないよつにするんじゃなくて…読む…？

そつか…俺達は読まれない様にする事に気を捕われすぎていた。

心を無にする…か。

あの店長さとも中々役立つ事を言つ。

『店長ー！俺とメルトも混ぜてくれー』

「メテイーー？俺は…」

『もし大樹が漢字を読める様になつたら困るだら?』

「…かなりな」

『じやあ心を無にする修業だと思つて……な?』

やれやれ…とため息を吐いたメルトだが、仕方なく参戦する。

「竹の子竹の子マッシュチョップ...」×6

.....。

ゲームはスタートしたが、誰もカウントしない。

店員さんはビルAくらいの魔力を感じたから、かなりの腕だと思う。

こんなくだらないゲームだと思っていたが、心が読まれている。

「くだらないなあ... 一一三四キ...」

「一一三四 キイヤア！」 ×4

メルトのカウンターと同時に店長と店員二人がカウントを始めた。

『メルト、真剣にやれ』

『こんなゲームをか?くだらないえ』

『バーカ、お前今読まれてたぞ?』

『.....！』

なるほど、皆して修業に付き合ってくれるわけね。

どうやら俺達は氣を消し、店長と店員の道連れ攻撃を避けないとけないらしい。

「三回俺と攻撃がかぶつたら…マッチョになるまで帰れないよ」

やべ、本気になる。

この店長ゲ つて噂だからな。

もし店長が噂通り、 イだつたとしたら…ひこ！

メルトもそれを察知したのか、 頬から汗が垂れる。

前々回ヒビ田にあつたからね、 今回も危ないよ、 メルちゃん。

そして二回戦。

またしても硬直状態。

…読まれてる、 確実に。

手の動き、 口の動き。

身動きが取れない…。

間違いなく俺の動きに合わせてくれるだろう。

…どうする…どうする…。

……………そうだ！

心を無にするんだ。

目を閉じ、 俺の精神と場の空気を融合させるイメージを作る。

全員の呼吸が聞こえてくる。

.....。

(メテイーの気配が…消えた?)

今だあーー！

『1一二三四キ一』

「…！」 × 4

.....。

メテイー、クリアー。

さうに呆氣を取られている隙に間髪入れずメルトが

「2一二三四キ」

メルト、クリアー。

「ガハハ、やられたよ」

店長は手を額に当て、まいつたとポーズを取っている。

「これで能力者にも読まれねえな」

『知つてたのか店長?』

「ああ、俺の仕事は鍛冶だぜ?鍛えるのは武器だけじゃなく、お前らみたいなガキもだ」

はは、おかげで良い修業になりましたよ。

「これは選別だ。持つてけ」

店長はカマルトよりも一回り大きいサイズの大鎌をくれた。

『いいのかー?』

「俺の負けだからな。特注品だぞ?」

スゲエ魔力が込められてる。それに軽いし握りこたえも抜群に良い。

「魔鎌、ガマルトだ」

『サンキュー店長!』

目的の品も手に入り、満足気に店を後にした。

よし、心を無にする事もできたし、負ける気がしねえぜえー!

-----。

「いいんですか？店長。ガマートをあげひやつて…」

「アハアですよー！あれば店長が長年掛けて鍛えた名鎌じやないっすか

！」

「ククク、ガマートはメーティーの父親が鍛えてくれと持つてきたもんだつたから、元はと言えればアイツの物だ。

それに…あれが軽いと思つか？」

「…？メーティーは軽々と持つてましたが？」

「ガマートには強力な潜在魔力が込められている。故にマッチョな俺でも持つのがやつとなのわ」

「……つてことな

「…メーティーって奴は

「…実は超マッチョ？」

違いますー メーティーの魔力が強すぎると聞ひつけた事です。

-----。

「『』機嫌だな、メーティー」

『まあな、こんなに魔力を感じる鎌は見た事がねえよ

ガマルトには凄まじい潜在魔力を感じる。

「ここまで凄いと、鎌と言つても狩る以外に別の使い方があるんじゃ
ないか…？」と、期待してしまつ。

「フォツフォツフォツ、そこの君達」

不意に声をかけられ、振り返つてみると白衣を着たオッサンが立つ
てた。

頭のてっぺんにハゲを作り、サイドの髪は全部白髪。
さうして鼻がでかい。

うん、コイツ博士だ。

『メルト…田を合わすなよ

「え？ あいつ知ってるのか？」

『いや、知らん。ただ、下手したら持つてかれるぞ』

「持つてかれる…？」

「おーおー、君達、何ブツブツ言つてゐの？」

『つむせえ、お茶 水』

「お茶の……それせびりやひ意味だ……？」

『人間界では有名な博士だよ』

「フオツフオツ、悪くないの?」

「どうやらあだ名を氣に入ってくれたようだ。いや～良かつた良かつた。

「んで、博士が俺達に何の用だ?」

「うん、さすがメルト。話進めるのが上手いね。

「フフフ、赤い田の挑戦者を確かめに来たんじやよ」

「ハア……またそりこつ奴か。

最近は魔界にいる時も皆からの視線が冷たいんだよね。

たまに《コイシラを倒せば俺が赤い田に挑戦できる》なんて考えの馬鹿も現れるし。

ま、そりこつ馬鹿は全部返り討ちにやつたナビ。

「嘘だ馬鹿にやれ悔しいか?」

『せつでもねえよ。俺とメルトなりでやれる』

「今の君りじ……無理だね……」

「イツむかつくな。
そろそろぶつ飛ばしていいか？」

「アラーム！」

「お、今の言葉が积に触ったのか、メルトが博士に呪文を唱えた。

「フォツフォツフォツ」

「効いてねえ？」

「馬鹿な！ メルトの呪文が直撃したんだぞ！？」

「ただ呪文を唱えればいいってモンじゃないよ、デビルAトップのメルトくん」

「何者だ…アンタ」

「フォツフォツフォツ、通りすがりの博士さ」

『フン…ならこれでどうだ？…ガマルト…』

大鎌ガマルト。

そいつを一振りするが、あっさり博士に避けられた。

ガガガガ…

後ろに飛んだ博士にガマルトの衝撃波が飛ぶ。

「…フォツ…？」

これは予想外だつたみたいだな。

何せ、俺自身が予想外だもん、こんなの。

「じゃが、甘いよ」

たつた一本、右手を衝撃波に向けるだけで攻撃に耐えた。

いや、衝撃波を…消した?

「フォツフォツ」

憎たらしく笑う博士の手には小さなドクロ…?

なんだ、あれ?

つてか…何で効かねえんだよ!

「気になるかね? 何故効かないのか。…付いてきなさい。君達の魔力

力を上げてあげよう!」

気が付くと俺達は、無意識のうちに博士に付いていった。

-----。

俺達は人通りの少ない道を延々と移動。

木々に囲まれた白い建物。旗から見れば研究ラボとも言える場所に着いた。

「ここがワタシの研究室じゃ。入りなさい」

中に入ると、訳の分からぬ機械がズラリと並んでいた。

「まず、そのまえに確認したい事がある」

『勿体振らないでとつとこしろよ』

「君達のチームワークを見させてもらおう」

そつと博士は、俺達の目の前に三つの箱を持ってきた。

箱にはそれぞれ、A、B、Cのアルファベットが書いてある。

「Aの箱には魔力増強に必要な物。Bの箱には強力な魔道具。Cの箱の中身は秘密じゃ」

『…これはどうじると?』

「相談なしで一人の意見を同時に言つてもらう。例えば、一人共Aと言えば、二人の魔力を上げてやる。ただし、外した場合は駄目の一発勝負じゃ」

ぐだらねえ心理ゲームか。

「フォツ、まあ選びたまえ」

俺にはガマルトがあるからBという選択肢はない。

…が、メルトはと黙り、特別強力な魔道具はないわけだ。

パートナーを考えるならBが良いだろ？

いや、しかし魔力を上げてもむづの悪くない。

個々のステータスが上がれば呪文も使える回数も増える。

そして、謎のことも選んでみたい。

…これ結構難しいな。

「頭脳明晰のメルト。魔力だけのメディー。凸凹コンビのお前らが、クリアーできるかの？」「

…よし、考えるの面倒だ。

「『全部』」

俺とメルトはほぼ同時に答えた。

「…フォツ…？」

『はい、俺達の勝ち。さあ、全部もむづか

「待て待て！なんじやお前達は…？」

「メディーなら考えるの面倒だとか言って、全部つて答えそうだからな」

「…なら、メディーは失格じゃ。メルトがパートナーを考えても、お前は自己中心的な考えじゃからの！」

『馬鹿言え。メルトなら、俺の考えに合わせてくれる、と信じてたのさ』

『フォツ フォツ…なんて奴らじゃ…』

博士は参ったと言わんばかりに、額をペチーンと叩いた。

『約束は守るついで、箱を開けてみるがいい』

『やつい』

俺は早速Aの、魔力増強の箱に飛び掛かつた。

『箱の中身はなんだろうな』

パカッと開けてみると、小さいワープホールがあった。…うん、これ吸い込まれるね。

『てめえ御茶 水ざけんなああ……』

そして、俺とメルトはワープゲートに吸い込まれていくのだった。

チョメティー第六話～父が残してくれたモノ・前編（後書き）

次回へ続きます。リプレイと交互で読み難くなつてしまつてゴメンなさい。

リプレイ第七話～花火大会とマイツ

「ここやああああ――――」

ああ～うぜ。

せっかくの休日このんびり「ロロロロ」寝していたつて言つて、元のつらい、愛

の馬鹿でかい声で田が覚めちつたぜ。

「譲ぐーーんー！」

『なんだよお～…悪魔でも来たのか?』

「ド…ドーンって大きな音がしてねーあ…あ…赤い田が空にー」

『ハアー!?』

赤い田が空に現れただとー? 神のお世話だとでも言つのか?

『ドコだー!愛ー!?』

慌ててベランダまで駆けて行き、空を見る。

辺りは暗くなっていた。どうやら寝て2時間くらい仮眠との予定が、かなり寝てしまつたみたいだ。

ヒュウカウ～……

ド――――ン――!

「ほらー！また出たあーー！しかもイッパイ出たあーー！」

うん、花火だコレ。

「早く、大樹君呼んで……！ヤアアアー！緑色の田とか青い田まで出たあーー！」

『あのね、愛。アレは花火って言つて……その……見て楽しむモノなんだよ』

「バカじやないの譲君！だつて爆発してなくつちゃうんだよー？きっと私達の目もヒュウウ～ドーンつて！イヤアアアアーーーー！」

よし、とつあえず黙らせよづ。

『落ち着け、ほら、メロンでも食べて……』

「メロンなんて食べてる場合じやないでしょーそんなの後回しで…すぐになんとか…後回し…うん、まずはメロン食べよづ」

よし、落ち着いた。

施設の裏庭には畑があつて、メロンも作つてゐるから、いぐりでも贈つてくれる親切な人がいるのだ。

ただ、親切の度が過ぎて、『いつか…贈られてくる量が、毎年ハンパではない！』

しかも、食べ切つてない内に次！ ほらまた次！ …と、来るので、ぶつちやけメロンは見たくありません！

でも食べないと悪いと思ってメロンジュースにしたり、ジャムにしてみたり、焼いてみたり煮てみたり。

さすがに後半は失敗だつたが…。

「うん、おいしい！ おかわり」

今では全て愛の胃袋に納まるからメツチャ助かつていていたりする。

「譲君、いつもメロン食べないね」

うん、だつてもう見たくもないしね！

『そうだ、愛。あれは花火。人間はアレを見て楽しむんだよ』

「じゃあ恐くないの…？」

『むしろ見慣れれば綺麗だよ』

「だつて音大きくて恐いもん」

『今日は駅近くで花火大会なんだ。行つてみるか?』

「ヤダ!恐い!」

『屋台で美味しい食べ物イッパイあるぞ』

「譲君!何してるの!?早く行かないとなくなつちやうよ!」

すでに人間モードの愛。

愛は人間界の食べ物に弱い……と。

-----。

「歩きにくいなあ~」

『でも似合つてるや』

「ホント!?」

今日の愛は花火大会と言つ事で浴衣になつていて

雑誌を見て瞬時に「ピー」したのだ。

「譲君も似合つてゐよ~」

ちなみに俺はジンベエだ。

今日ばかりは戯いの事を忘れて、純粹に花火を楽しむとするか。

「からあげだあ～！」

…アイツは常に忘れてる気がするけど…まあいいか。

愛だつて戦闘モードになれば人が変わつた様に目付きも恐くなるし…

「おじさん、暑いのに大変だねえ」

「オッ、じつや可愛いお嬢さんだ。ほら、からあげ一個おまけだ!」

「ありがとう」

うん、愛だつてホントに変わるんだよ。

しかしこの花火大会は、日本で五本指に入るほど有名であるため、会場に訪れる人もごつた返つていてる。

ほーっとしていたらすぐにはぐれちゃうからな。
氣をつけないと…

あれ？ 愛がない。
うん、早速迷子か。

『マジかあーー！愛ーー！ドコ行つたあーー？』

必死で探してみるものの、人が多すぎて思う様に前に進めない。

ドコを見ても人！ 人！ 人！ ！

マジ群れすぎなんだよチクショオ！

愛はピンクの浴衣を着てるけど…ピンクなんて女の子に人気な色、他にもいっぱいいるしなあ…。

しつかし、ホント色んな人がいるね。

親子仲良く来ている人達。単車ころがしてコール切つてる若いお兄さん。

気合い入つてメイクしてるお姉さん。

赤い目の女の子。

……うん、おかしいね。

『こんな大勢の人前で能力使うなあ～！』

「あ、譲君。ダメだよ、迷子になっちゃ」

『それはお前だ。どうせ一人で屋台突つ走つてたんだろ』

「エヘヘ」

『あと、それからね。早くこの人達のシールドを解除してあげなさい』

愛にナンパ 愛は屋台に夢中 お兄さん傷付く 無理矢理 愛キレ
る シールド。

どうせこんな所だろ。

シールドは完全密封状態だから、長時間閉じ込められると血枯しこんだよね。

本来は防御に使うシールドを攻撃に使うとは…。

ね？ 戦闘モードに入った愛は恐いんですよ。

「花火見づらいよお～」

『じゃあ近くに良い場所あるから、そこに行くか…』

「行こ行こお～」

なにせ、まだ会場に着いてすらいないからな。『じゃあ落ち着く事もできない。

「もうはぐれちゃダメだよお～」

『だから、それは愛だつ…』

「…ん？…どうしたの？」

『いや…別に』

「フフフ、じゃあ行こつ」

いや、何このシチュエーション。周りはカップルで来てる人も多い。

俺達だつてそう思われてるかも…。

手え…繫がれた。

俺達は今、人前を手え繫いで歩いている。

そついや俺、今まで彼女とか作った事なかつたな。

ようやく会場に到着。

でも俺は人「ミミが嫌いなので、ちょっと離れた所から見てい

「す、おー、超良く見えるー！」

さつきまで花火を恐がっていた愛も現金なもんだな。

まあ、この場所は俺のベストスポットだ。

高い所だから全ての見通しが抜群に良い。

「弓きこもつ君だつたくせに、良くこんな所知つてゐるね

『弓きこもつ君だつたくせに、良くこんな所知つてゐる前は、弓弓で良く遊んだもんだよ

遊んだ…と言つまつ喧嘩か。

まあ、俺達にとつての喧嘩は遊びだつたとも言つが。

なあ……リョータ。

リョータ……小学二年生の時の親友。

結局リョータは、俺に一言も挨拶しねえで転校しあがつたけどな。

「譲ぐ……ん？ もしかして泣いてん……」

『汗だよ！ 今日は暑いからな！ かき氷でも買つてくるよ。 ちよつと

「動くなよ』

バカか俺は？ 何いまさら思い出して泣いてんの？

『おつかせやん、かき氷一つ！』

『はいよー！ シロップは好きなのが好きなだけかけて良いよー！』

レモン、イチゴ、ブルーハワイなど定番なシロップが並ぶ中。

……なぜか俺は嫌いなはずのメロンシロップを選んでいた。

『お待たせ、ホラ』

『わあ メロンだあ ……フフッ 優しいね、譲君』

『だらー』

「ふうん、こんな所にこんな場所があるなんて、リョータやるじやん

「最近舞に構つてやれなか……」

「『…………』あ『』」

『……リョーダ？』

「……譲？』

しかし変わらないってわけじゃないが、昔の雰囲気で一瞬で分かつた。

コイツはリョーダ。

俺の親友。

そつか……この花火大会は日本五本指に入るで有名だもんな。

昔も……花火大会中もココで喧嘩してたつけ。

『急に消えやがって……女連れて登場か？ナメテるねえ～』

「それはお互いにさ……」

ん？ リョーダが愛の事見て固まってる？

さらりにリョーダの彼女も……愛を凄い形相で睨んでいる。

「てめえ……」

なんだよオイ、リョーダ達から思わずビビッちまつ程の怒りのオーラが出ている。

それは全て、愛に向けられたものだつた。

「てめえが明を連れてつたんだろ！！！」

「何で事すんのよアンタ……明を返してよ……」

怒りのオーラ… それは悲しみへと変わり、一人共泣いている。

『オイ・リヨータ、何言つて』

「譲は黙つてろ！」

あ?

楽しいはずだった花火大会。それは思い出の場所に来た事により、
親友との偶然の再会を果たした。

しかし、それは歓喜の再会ではなく、修羅場との再会でもあつた。

「メテイー… 明は悪魔よ」

「ザケンなあ！ 明は人間だ！」

メテイ一明

そうか、リミータと彼女はメティーの人間時代の頃の友達……いや、親友か。

そして、愛がメディーを魔界に連れ戻したんだつたな。

それでリヨーダ達は、愛を怨んでいるのか。

親友と強制的に別れさせた愛を…。

「明は翼も角もある。呪文だって使うし、今は私や譲君の命を狙つてるわ」

「嘘付け！明は人殺しするような奴じやない！」

『リヨーダ、愛の言つている事は本当だ。メ…明は悪魔だ』

「俺の親友を悪魔呼ばわりすんじやねえ！」

リヨーダはガキの頃はクールな奴だつた。人を挑発した態度で喧嘩こそしたものの、今みたいに見境なくキレたりする奴ではない。

あれから9年経つてゐるため、リヨーダの全てが変わつたかもしないし、9年前の親友より、1年前までの親友の方が大切なも分かる。

だが…

「このッ」

もう喧嘩の腕は…格が違つんだよ…。

『辞めるリヨーダ。お前のパンチは俺には当たらない』

「くそ…なんでこんなに強くなつて…」

悪魔を相手に命懸けで戦い、人間離れした能力と、それを使いこなす精神力と修業。

生身のリョータが俺に勝てる訳がない。

『愛、無関係の人間に能力を使つたら…神様に怒られるか?』

「フンッ！神様はアタシを天界から追い出したのよ…？そんな捉、関係ないわね！」

まあ愛は一般の人間に能力使つてたしな。

『じゃあ…——能力発動。破壊能力！』

右手をかざし、威力をコントロールする。

「ドバーン！」

激しい音と共に、リョータの真後ろの木が木つ端みじんに弾け飛んだ。

「コントロールできてるわね。お見事…」

「…な？…譲…？お前…」

もちろん能力でリョータを攻撃しようなんて気はサラサラないさ。

ただの威嚇。話を聞いてもらいたいだけ。

『分かつただろ？俺のこの能力を欲しがつた閻魔の使いで、明は俺を殺しに来ている』

「誤解しないでね。明を魔界に連れて行かなかつたら、人間界は混乱していたでしょ？それは天界にも悪影響を及ぼすの」

リョーダと彼女は黙り込んでいた。

そして力なく座り込んでしまつた。

「ハハ…何だよ…。譲も…明も…急に遠いトコ行つちゃつてセ…俺は置いてけぼりかよ」

『明は悪魔だが、俺は人間だ。まあ、この能力は人間離れしてゐるけどな』

本当は…リョーダにこんな事したくなかったけど、仕方ないよな。

それに、ちゃんと知つてゐるんだ。

リョーダはクールな奴だから、親友にだつて涙を見せたくない奴だつて事も。

だから俺と別れる時だつて、一言も声かけてくれなかつたんだろ？

そんなリョーダが、明を失い、辛かつただろ？

『譲は明を殺すのか…？』

『むろん、そのつもりだ』

「頼む…殺さないでくれ」

『そしたら俺が殺される。リョータ、明は戻つて来ない。できる事なら、俺達をもひつれてくれ』

「ウウ…」

初めてリョータの涙を見た俺は、無意識の内にリョータの肩に手を置き、なぐさめてやつた。

「私つたら、何も知らないくせに…ゴメンなさい…ゴメンなさい」「いいの、気にしないで」

さつきの暴言を必死に謝るリョータの彼女を愛は強く抱きしめた。

一人の泣き声を搔き消す様に、綺麗な花火が夜空に上がつていた。

リプレイ第七話～花火大会とアイツ（後書き）

はい、作者のタンポポです。いやあ～譲君の過去の親友で、あやふやだつた奴はなんと、チョメディーに出てきたリヨータくんでした。
明の喧嘩友達として活躍。クールな性格だが、明と絡むと崩れる。
親友が親友を殺す時…何もできない自分。今後もリヨータの登場がありそうな気がします。

チヨメティイー第七話／父が残してくれたモノ・後編

『いたた…』

「大丈夫か？メティイー？」

『ああ、なんとか』

前回ワープゲートに吸い込まれた俺達。

どうやら御茶ノ 博士君は俺達を裏切ってくれたようだ。

改めて辺りを見回してみると、何もない。

本当に何もないのだ。

真っ白な空間。地面すらも同色と化していて、なんか気持ち悪い…。

ド「までも果てしなく続く空白の世界に、俺とメルトだけがポツンと浮いている。

「フォシッフォオオ！」

そして上から聞こえる、このクソムカつく笑い方は…

『てめえ！テイーのウォーター！？』

「テイーのウォーター！？」

『早く出せやー！何のつもりだよー！？』

「何つて……箱の中身を手に入れる為の試験じゃよ

『試験はさつき合格しただろ？』

「馬鹿モン。あれは何の試験を受けるかのテストじゃ。これからが
本番」

大人は汚ねえや。
いつも僕達ピュアな子供達の心を弄ぶんだ。

ほら、お前の好きなゼリー買つてきたぞ わあ！ パパ、ありが
とう……つて、これイチゴ味じやん！ 僕はレモン味のゼリーが好
きなのに！ パパの馬鹿あ！

つてな感じで大人は子供に甘い誘いをした後狩るのさ。

「Aの試練、魔力一点集中」

博士の声と同時に、目の前には馬鹿でかい門が現れた。

中心にはドクロの不気味なデザインが入つていて悪趣味な門だ。

『あーあのドクロはわつき博士が持つてた奴じやん！』

「そのドクロに呪文をぶつけるのじや。ある威力に達すると門は開
き、クリアーとなる」

用は俺達の魔力を試してるんだろう？

『久しぶりに俺が行くぜ！』

周りは畠の世界。精神を集中させねばいけないこの場所だ。

『ガマルト！』

名鑓ガマルト。ただ振るひだけでも衝撃波が飛ぶのが分かった今、もはや恐いモノなしだ！

『..あひひ』

野球のバットの様に思いつきスイングしたガマルトからは、むつきより凄い衝撃波が発生した。…しかし、それがドクロに吸い込まれていく…喰われた！？

『なんだよコレ！？』

「アラームラディー！」

寒波いれず、メルト十八番の爆発系最強呪文。

が、それも同じくドクロに喰われてしまった。

「…チツ」

そつか、博士はさつきして呪文を消したんだな。

おこおい、メルトでも黙日となるとお手上げですよ。

出られねえじやん！

「フォツフォツーまだまだ甘このつ

『おい、ティーのウォーター!』

「何かね、判断力赤点のメティー君」

『ヒントくれ!』

「フォツフォツ、泣き寝入りかね? 残念じゃが、魔力を一点に集中すれば呪文の威力も上がるじゃろう、などと教えるわけにもいかんぞい?」

『クソ! なんてこつた! ジャあもう完全にお手上げじゃねえか! まさか呪文を一点に集中すれば良かつたなんて思い须くはずもないなるほどおおーーー!』

「しまつたあーーー!」

呪文を一点集中か。そいや試験のタイトルがそだつたな。

『メルト』

「ああ」

『俺はガマルトに魔力を込めてみるー!』

「俺は魔力を上げつつ爆発の範囲を狭くし、呪文の効力を圧縮するー!」

『ガマルト!』

「アラームラーディー！」

衝撃波と爆発が同時にドクロに直撃。

また呪文を喰らつたドクロだったが、威力に堪えられず、破壊！

門が開いた！

「フォツフォツ、お見事！メルト君。呪文…特に爆発系の呪文の弱点は、範囲の広さから威力が分散してしまう事じゃった。

範囲を狭めたのに同じ魔力を込める事で威力が上がるのじゃが、まさかイメージしただけで一瞬でマスターしてしまうとは…やはり天才じゃの

メティーも、ガマルトをただ振ってるだけじゃ宝の持ち腐れじゃ。武器にも魔力を込めてなんぼじやからのう

『そんな御託は良いからさー早く魔力増強アイテムくれよ…』

「ないわい、そんなもん」

『ホワイ？ティーウォーター？マタダマシタネ…？』

「じゃが、お前らの呪文は強力になつたじゃろ？」

大人は汚ねえや。

「そつ落ち込むなメティー。博士に鍛えてもうつたと思えば良い」

「フォツフォツ、ですがはメルト君。話が分かる。マルトにやつくりじゅう」

「父上を知つてこるのですか！？」

「マルトを鍛えたのはワシジヤからなー…もうひん、メティーもじやよ。あこつらも世話お前達みたくコンビを組んだった」

ハハハ、親子揃つてお世話になつたつてことか。

親父もいじつて強くなつたんだなあ。

「Bの試練はむつかる必要もないじゅう。メティーのガマルトに敵つ武器もやうない。何せメティーの相棒だった武器じやからひのう」

『えー？』『じつて親父のだったの？』

「わうじゅ。鍛冶屋にガマルトを取りに行つたんじやが、店娘がメティーに渡したと聞いてのう。息子も見てみたかつたし、こうして修業してやつたわけじゅ」

一度ガマルトの威力を体感している博士には分かつたのだろう。

…今更だけど、俺そんなスゲエもん持つてんだなあ。

『じゅあさーこの謎の箱つて何だったの！？』

「それじゃが… メルト、お前には「ノンをやれつ」

博士は黒光りしたピアスをメルトに渡した。

「コレは… 犬？ … なんて可愛いモンじゃないな。

邪悪な笑みを浮かべた悪魔デザイン入り。

「ケルベロスのピアスじゃ。試しに使ってみな？」

メルトはこの場で耳にピアス穴を開け、ケルベロスのピアスを付けた。

「この箱の中身… それは召喚獣じゃ。メルト、ピアスに魔力を込めてみるがよい。… ちなみにマルトが昔付けていたものじゃ」

「父上…が…」

言われるがままに、メルトはピアスに魔力を込めていく。

「解き放て… 悪魔の番犬、ケルベロス」

そして魔力を放出。

すると、田の前には体長は軽く4メートルを越え、頭が三つある、凶暴そうな黒い犬が現れた。

「マルト…様？」

「喋った！？」

犬なのに喋つたよコイツ。

「マルトは父だ。俺はマルト。今日からお前の主人だ。ヨロシクな

「…ガツテン！」

ガツテン言つた！？

つてか真面目な流れで來てるんだからムリにコメディー入れないで
良いから…

「黙れやマディー！今日こそ決着つけんぞ！」

『俺はメディーだ！』

つか親父もケルベロスと仲悪かつたんかい！

「召喚獣は主人以外には懐かないからの！」

ケツ、良い喧嘩相手ができて良かつたよ！

『博士は最初っから俺達を鍛えてくれるつもりだったのか？』

「フォツフォツ、そりじゃよ？」

『じゃあ、もし…最初の箱選択で不合格だつたら…？』

「まあ、奴らの息子に限つて、それはないと信じとつたよ。じゃが
…もしもの場合、その時でも鍛えてたかものう

なんだ。久しぶりにマジになつちやつたじゃんよ。

ま、必死になつて頑張つたから価値はあるつて事にしと」、「うん。

「ちなみに、奴らも同じく全部つて答えたぞい？お前らと顔も性格も良く似てるわい」

俺と親父が似てる……？

まあ、ケルベロスが主人を見間違えるくらいだからな。

なんか……嬉しいなあ。

……親父も俺と同じ歳の頃、マルトさんと博士に鍛えてもらつた。

そして時が流れ、今はその子供、つまり俺とマルトが鍛えてもらつた。

何か運命的な物を感じるな。

形見となつてしまつたが、俺には親父が残したガマルトが。

マルトにはケルベロスが。

いつか……俺達は立派なサターンとなります。
どうか、見守つていて下さい。

チョメディー第七話～父が残してくれたモノ・後編（後書き）

更新遅れました…。本当はこんなにコメディーをやるはずじゃなかつたのに…（笑）

最強

武器を手に入れたメディー、召喚獣が使える用になつたメルト。能力がコントロールできるようになつた譲に、新技を編み出した大樹。

成長した彼らに戦闘が近付いてきましたよ！大樹の新技も、戦闘結果も既に頭の中でイメージでてきてます。後は書くだけ！メディー達のリベンジなるか！？

リプレイ第八話 ゲームでポン

「ピカー……」
「ヒヤアー！」

まだ夕方なのに、どうも外が暗いと思ったら雷が鳴ってるのか…。

愛は脅えて布団を纏つて震えてるし…。

『愛、そんなに怖がらなくとも電気使わなければ大丈夫だよ』

「カスみてえな事言わないでよー雷様 らいさま が怒ってるんだ
よ?今頃天界は…ヒイイ」

カスつて言われた…。ちょっとショック。

つてか雷様つて…なんか良くなアーメとかで背中に太鼓みたいなのが
あつてチリチリパーーマの鬼を想像してしまつ。

「雷様は普段は優しいから、怒ると走りながら怒鳴るの…。神様で
もキレてる時の雷様には関わらない様にしてるわ」

雷様こええ…！

『つて事は、一緒に降つてる雨は雷様の汗か涙かな?』

「海へ流れ込んだ川の水が太陽の熱で温められて、それが集まつて
雲になり、雲が冷えるとまた水に戻り地面に落ちる。これが雨です。」

あまりカスみてぇな事言わないで下せこ

うぜえ～！ 雷様が居るつて言つたからロマンチックにさせただけなのに向ひの言われ方？

『今日おかずナシな』

「それだけは勘弁して下せこ

いやあ…ってかどつこしても雷が止まない事には買ひ出しありがどくね。

そもそも愛が買つてきた食材を毎日一つ残らず料理しきつてひるをいから常に材料の在庫がないんだよな。

まあそれで料理しちゃう俺が悪いんだけどさ。

『後一時間もすれば止むだろ。そしたら買ひ出し行へから、それまでおとなしくしてなさい』

「はあ～い。じゃあゲームでもせうつと

いそいそとテレビにアダプタを差し込み準備する。

…つて、待て待て。俺ん家にゲーム機なんてないぞ？

『さそりがため』

始まつた！ つてかタイトルおかしい…！

——舞台は昭和。ある一人の『コージ・シャン』、たった一言から全ては始まった……。

「ああ～…そそりがためしてえ…！」

それが彼の最期の言葉となつたのでした……。

フニーネ

…終わつたあ～！ なんだここのクソゲーは！

「うんうん、私もラストライブで聞いたさそりがためには思わず涙
しちやつたもんねえ……」

いやウゼエよ。

『つてかこのソフトと本体はどつしたんだよー?』

「買つてもらつたんだよ～大樹君に。また『すりつ』って言つた
つで能力使つた事を譲君への口止め料として……あ、言つちつ
た」

ふーん、また大樹がねえ～。アイツ能力なめてんな、確實に。

『ハア…他にソフトないの?』

「う…ん？あ、コレが合った。一人でできるよー。」

ハイ、とコントローラーを渡されたので反射的に受け取つてしまつた。

『ちょっと…俺ゲームとか苦手なんだつて…』

そう、俺がゲーム機を持つていらない最大の理由がこれだ。

単純にヘタクソなのである。RPGなど長つたらしいのは「ermenだし、格闘系もコンピュータに勝てず、しかもすぐ飽きる。

「大丈夫。恋愛系の心理ゲームだから」

一番苦手なジャンルですな。

『二人用なのにか？』

「そうだよ。まずアタシが質問事項を考えて、状況に応じた解答を譲君がするシミュレーションゲームだよ」

まあ…用は愛の考へてる事を当てればいいんでしょ？

「じゃあ質問に答えるから、ちょっと見ないでね」

そう言つて後ろを向かされてしまい、テレビ画面が全く見えない体制になつた。

カタカタと軽快なボタンさばきが聞こえ、途中フフ…など、不気味

な笑い声が聞こえてきた。…「コイツ、口クな質問入れてないな。

「はー、できた！ もう良こよ」

画面を振り返ると、バーチャルで作られた二人の男女が現れた。男の方は目が隠れる長さの黒髪に、てっぺんがシンシンと立ち、鋭い目付に無愛想な表情を浮かべている。

……うん、コレ俺だ。

「似てるでしょー？」

「どうだ！ と言わんばかりに自信満々の愛。

キャラ作成中は俺の顔を見てないのに、良く俺の特徴を掴んでいる。
…なんか嬉しかったり。

ちなみに、愛と再会した時は短髪だったが、もう伸びてしまった。
長年の間、長かったから、前髪が短いけどいつも落ち着かないのだ。

『そつくりだよ』

「私のもでしょ？」

艶やかな緑色の髪はクセがなく、髪と同じく緑色の瞳はクリッとしていて、白い肌にナチュラルメイク。

愛こそつくりだ。

『お前す』こな。たくさんある中から良べんポイントで選べたもんだ』

さすがにこれには感心してしまった。しかし、今時のゲームも凄いもんだなあ。

「そつくりだつたら、口口を押してね

画面には、《似てる》《似てない》の一沢が現れた。

愛に言われた通り、俺はためらわず《似てる》を選択。

ピローンと効果音と共に画面右下の、五個ある空ハートの内、一個田がピンク色に染まった。

なるほど、どうやらこのハートは一人の好感度であるらしく、愛と俺の気が合つ選択をすれば良いらしい。

これならゲーム音痴の俺にもできそうだな。

ユズル『どにか出掛けよつか』

アイ

「うん。私行きたい所があるんだ！」

ユズル『前言つてた所だな？ 確か……えーと……』

『彼女がやりたい事は?』

- A・ボーリング
- B・ビリヤード
- C・テラマックに挑戦

三つの選択肢が出てきた。

あ～…ぜつてえコレだ。

『し…し…かな?』

カーソルを合わせてポチッとボタンを押すと、またピローンと音が鳴り、ハートが一個に増えた。

「わっすが譲君一買い出しが楽しみだわ」

この後行く気だあ～…。

ユズル『今日はマッキュドテラマック挑戦の日だつたな

アイ

「そうだよ。そのためにオヤツ抜いてきたんだからー…

二人が笑顔になり画面が切り替わり、背景はマッキュになった。

店員

「いらっしゃいませ。ご注文はお決まりですか?』

ユズル『テラマックに挑戦します』

店員

「かし！」まじました。何個でしょうか？」

『テラマックは何個?』

- A・一個
- B・三個
- C・もあるだけちょうどい！

おかしいおかしい！

何で一個つて選択肢がないの？

コレは…愛のノリ的に…

ユズル『あるだけ下さい』

店員

「お客様、お会計が足りない様ですが…?」

アイ

「もお～見栄張らないでよ。恥ずかしいわ、ポンポン」

『彼女の機嫌を損ねてしましました』

デレレーン…と、ハートの半分が減少。どうやら選択肢を間違えた様だ。

「いぐら私でもそんなに食べないよお～。正解は、一一個！讓君と一
人で挑戦しようと思つたのにい…」

『わ…わりい』

これ正解すれば良いけど間違えると結構雰囲気が気まずくなるなあ。

まあ、愛を知つておく良いチャンスかもしれない。

アイ

「ふう… 樂勝だつたね」

ユズル『そ… そうだな』

アイ

「そ、晩御飯の買い出し行―うか！ 今日のメニューは何？」

ユズル『今日はアイの好きな…』

『彼女が喜ぶメニューは？』

A・おかげナシ

B・外食

C・霜降牛肉のワイン煮にデザートにはメロンのタルトだよ

…… IJの野郎。

「ああて、今夜のおかずは何かな～？」

『それは現実な質問かな？』

「ううん、ゲームの中だよ」

『じゅあ…じで…』

「やつこー今田ばい」馳走だね

…… IJの野郎

ユズル』でも手持ちがないから、銀行でお金下りしていくね
テロリロローンと、一気にハートが増え、現在三つ皿が染まってい
る。残り一個、早く終わらせなくては破産するせ。

アイ
「うん、わかった

『ふざけんなあ！』

「早く早く～」

『早くとかじやねえからーお前パクる気だろー』

「…テへ……ダメ?」

当たり前だらこの野郎

この質問はスキップだスキップだ。

『次が最後です』

おお、助かったあー！

『すっかり日も落ち、辺りも暗くなりました。そろそろ帰らなくてはなりません。公園のベンチに腰掛け、今日の事を話していくと、そつと彼氏が手を握り、真面目な表情になりました。』

アイ

「コズルくん…?どうしたの、急にあらためて

ユズル

「アイ……

『データの締めに、一言甘い言葉を入力して下さい』

…だからふざけんなあ！

「早く早くう！私見ないから」

クルツとテレビに背中を向ける愛。

いや…でも…ねえ？

さっきまでの流れからしてゲームの内容を現実に捕えやがるし、かと言つて…いやいや！ だつて愛はエン・リュー・ファ、天使ですか？

一緒に暮らしてゐるが、何より俺は人との関わりを避けてきた罰として、女の子との会話がどうも苦手だ…。

学校のクラスでだつて男友達としか話さない。

愛とは普通に話しているが、それはコイツが『天使』だからだ。姿形は同じものの『人間』ではない。

ただ、蘇る…。花火大会での、あの変な気持ち。

手を繋がれた時の…今まで感じた事のない、あの変な気持ちだ。

現に、もし今、愛が天界に帰られては…俺は…。

おぼつかない手付きで、セリフを入力していく。

ユズル『オレは

これは俺の素直な気持ちだ。

ユズル『オレはアイと』

一文字一文字打つ度に、意味が分からぬ程緊張しているのが自分
でもよく分かる。

ユズル『オレはアイと出会えて』

隣で愛が楽しそうに、ワクワクしながら笑っているのが見えた。

コズル『オレはアイと出合えて

』

『できた。見て…良いぞ?』

「う…うん…」

バツと勢い良く振り返る愛。

しかし、その時…

～ブツン～

。……。

「『さて?』」

一気に黒くなるテレビ画面。そして電気も消え、薄暗くなつた部屋の中。

『ああ、そういうや雷鳴つてたんだ。ブレーカー落ちたなコリヤ』

『ええ～！？ なんでこのタイミングで…？ もお～雷様の馬鹿あ～！ 神様の意地悪う～…！』

「これは…もしや神様が人間と天使がくつつく事は許さないと言つ意味ですか？」

「それとも、ただの偶然か…。」

「譲ぐん！ 何て入れたの？ 口で直接言つて！ せえーの！」

『愛の大食いは食費に響きます』

「ウソだあー！ そんなのヤダアー！ 本当は？ さんハイ！」

『言わない…ってか言えない』

「もあ… こうなつたらゲーム通りの展開を再現して最後に特訓した公園行つて同じシユチユレー シヤンで…」

『それでも言わない』

「シールドー！ ああ、言つままで出さない…」

『破壊能力』

「いとも簡単に壊された……能力使はなつて自分で言つたくせに——！」

『それはお互い様』

「ああ～気になるう～！」

俺は愛と出合えて本当に良かったよ。できる限り……ずっと、このま
ま……。

チヨメティイー第八話 じこつをファイナルラウンドにじよひ

『ふあ～…眠ボ』

おはよ～、諸君。今日は珍しくメルトに起しそれる前に自分から起きた。

と、言つのも今日は重大な日だからだ。

まるで小学生が遠足に行く前日の夜の様に、緊張してなかなか眠れなかつたのだ。

ただ一つ違う所と言えば、『楽しみ』ではない。

それもそのはず。下手したら死ぬかもしないからだ。

「珍しく早起きだな、メティイー。準備出来次第行くぞ」

『了解…』

今日がおそれりく讓達との最後の決戦となるからだ。

博士の元で修業を積みパワーアップした俺達だつたが、気が付けば閻魔様に依頼を受けて60日が経過した。

赤い目の剥奪に与えられた期間は今日で最後。

これで駄目なら俺達に力がなかつたと諦めて大人しく罰を受けるさ。

『行こうか、メルト』

「ああ、死ぬなよ」

『それはお互い様』

いざ、人間界へ…。

ワープを済ませた俺達は上空に浮いている。

譲達の姿も見える。すでに奴らの行動はお見通しだからだ。

「不意打ちってのは好きじゃねえからな。正々堂々と行きますか」「不意打ちも何も愛に気配読まれてるから無駄だつての」

： それもそうだな。

ああ。人間のままだつたら…命懸けで戦闘なんかしないで皆と楽しく平和な日々を過ごせてたつてのに…。

メルトと拳をコツンとぶつけた後、俺達は譲達の前に降りた。

「待つてたわよ

愛…もとい、エン・リューファが腕を組んで言った。

じゃあ、行きますか。これがラストバトルだ！

「メディー！俺にまかせろ！」

その隙にメルトが攻撃に移る。

「召喚…ケルベロス！」

メルトが呪文を唱えると、魔法陣から現れた、三つの首を持つバカでかい犬。

博士からもひつたマルトさんの形見だ。

「行け、ケルベロス」

メルトが指示すると、人間に牙を向け勢い良く飛び掛かった。

「シールド！」

リューファがシールドを半球に張る。

しかし、ケルベロスの牙はシールドの強度を上回り、いとも簡単にシールドを破壊した。

「さすが父上の下部だ…続けていけ！」

初の実戦にも関わらず憲ピッタリのメルトとケルベロス。

「ひらりの有利は変わらない。

「ヤバイ…呪喚、ゴニゴーンー。」

今度はリューファが呪文を唱えると、一本角が生えた馬が現れた。

その大きさは、ケルベロスをも軽く越えていた。

「みんなを守って、ゴニゴーンー。」

ケルベロス対ゴニゴーン。

なんかゴメティー離れしてきましたね。

体制は若干ケルベロスが圧されている。

「うーん…やつぱりケルベロスがゴニゴーンに勝つのは無理か…

『いや、冷静すゝめるだろーなんとかしちゃ

「分かってるよ。ケルベロス…」

メルトの声を聞いたケルベロスは、ゴニゴーンから手を引く。

「ケガさせてゴメンな。よくやつた」

そしてケルベロスは、魔法陣の中に消えて行った。

「ゴイツを試してみるか…ガーゴイル…！」

メルトはネックレスを掲げ、それに魔力を込めた。

ホストでバイト中にババアからもらつたインチキ悪徳商業の召喚データー！

本氣にするなよメルト、そんなもん嘘に決まって…

「グオオオー」

ホントに召喚したー！

「なんだよあれ！？」

「これには譲も驚くだらうな…」

体調五メートルはある化け物だ。全身銀色で紫色の瞳は目が合つた
けで恐怖心を植え付けられる。

二つの鼻の穴には輪つかが貫通してあり、鋭い歯は歯をも砕きそつ
だ。

「ガアアアー！」

身震いしそうな雄叫びと共に、口から衝撃波を繰り出した。

「マジ？…ゴーゴーン…」

ゴニーローンの体から円形のシールドが張られる。しかし、それごと粉碎したガーゴイルの衝撃波。す「」すきる…。

「破壊能力！！」

譲の手がガーゴイルに向けられた。いくら強力な破壊能力だとしてもガーゴイルを破壊することは…

「ガキン」

ガーゴイルの鼻の輪つかが破壊された…？

「グオオオオ！」

よく分からぬがガーゴイルが苦しんでるみたいだ。

「やつぱり魔力の源は鼻の輪つかね」

…ちつ、リューファには召喚獣の情報は筒抜けって事かよ。

『こうなりや接近戦だ。行くぞ、メルト！』

「ああ、まずはこの前と同じやり方だ」

素早い動きで人間を翻弄。そして刹那の如く譲の両脇へ。

しかし、俺達が挟み打ちをするポイント。そこをベストタイミング

でドンピシャリで手を構える譲。

「…ベンゴー」

読まれてる…大樹か…！

「能力発動！」

破壊能力。

しかも両手から俺とメルトの二方向に…？

まず…

『ぐわああ

「チツ…」

とつさに防御を唱えた俺とメルトだったが、かなり後方に吹き飛ばされた。

「やつぱり力を分散すると威力も減るな…」

それで死なずにすんだか。しかし、かなりのダメージを負ってしまった。

しかも、動きが読まれている。

「…大樹か」

『おそらく…な』

やばいねコリヤ。

大樹に読まれてんじやん。

「別れるぞ。俺は譲を殺る。メティーは大樹を頼む」
『OK!』

大樹の看破能力…見事な物だ。勉強した甲斐もあつて、完全に思考が読まれている。

まあ、メルトは色々と考えるから、大樹とは俺が戦った方が良いな。

俺の戦い方は、そんな戦略なんてねえ。

とにかく突っ込むのみだ。判断力赤点野郎なんでね！

『くらええ！コルト！』

まだ大樹に見せていない呪文、コルト。

運気を大幅に欠落させる呪文だが、そんなもんは囮にすぎない。

呪文の効果を読まれるなら、接近戦だ。

所詮人間が悪魔の潜在能力に敵わぬってことよ！

「ふーん…」

あれ？

コルトが全く的外れの所に?
大樹の奴、もう避けたのか！？

『くそ…』

接近戦。

これはもう呪文など関係なしに、人間とのタイマンだ。

俺のパンチはメルトですら避けられない程のスピードだ。

そり、あのメルトですら…

俺のパンチは避けられない

なのに、なぜ！

人間なんかが避けられる？

「遅いね」

余裕の表情ニヤリと笑う大樹。

『このツ』

素早く繰り出した右ストレートは、いつも簡単に避けられてしまう。

： 今のは何か変だつたぞ？

『 もう一発だ！』

そしてまた避けられ…

いや、これは避けられたと言うよりも…。

俺が攻撃に移る前から、すでに大樹は避けている。

「 《先読み》 つて知つてる？」

： 先読み？

「 君の思考どころか、これからする事も読めるつて事だよ

攻撃が当たらねえ…。

「 あとね… もつと読まれたら困るのあるでしょ？」

ちくしょう… 人間なんかに…

「 もちろん、君の弱点も読めてるよ」

ハツ、と我に返つた時、大樹の拳が首の根本を直撃していた…。

「 僕達は普通の人間じやないよ。能力者だつて、潜在能力は人間離
れしてゐるんだ」

「メテイー、これを首に下げるけ

『閻魔様？これは？？』

「魔后石のネックレス。決して碎ける事はない」
『はあ…なぜ俺に？』

「未熟児は首が弱くてのう。ま、魔后石が首を守ってくれるのじや
『ありがとうございます』

そつか…魔后石のネックレスは譲の破壊能力で壊されたんだっけ…。

沢田大樹。やるじやん。

看破能力だけでなく、先読みの能力まで付けていたとは…。

コイツもまた、天才。

だから言つたんだよ…。人間のままで良かつたのに…。

…………ちくしょお。

「メテイー！」

「お前の相手は俺だ！破壊能力！」

「しまつ…」

破壊能力の衝撃をモロに受けてしまったメルト。

遙か後方まで飛ばされ、血だらけで倒れてしまった。
なんとか立ち上がったメルトだったが、翼はもげ、疲労困憊。立つ
ているのがやっとである。

俺はなんとか立ち上がり、メルトと元へ向かった。

体中が痺れている。ダメージは相当なものだ。もう強力な呪文は使
えそうにない。

『どうする、メルト…』

「…関係ない」

今のメルトは相当キレている。

下手すりや死人が出るぞ？

「読まれたって構わない。用は避けられなきや良いだけの話しだ」

…出る。メルトの呪文が。

「あのババアには本当に感謝だぜ。避けられるなら、避けられない
呪文を唱えるまでだ」

メルトが呪文を唱えると、人間達の足元に氷が張られた。見事な氷
像は足首にまで侵食され、身動きが取れなくなっていた。

『考えたな、メルト！』

「腕でガツチリ抱き抱えられてキスされ続けてりや、こんな事も思
いつくさ」

ああ、ホストの時でね。

なるほど、そんな辛い過去があつたのね。

「破壊能力！」

譲のパワーを抑えた能力で三人の氷だけが碎かれた。奴もかなり力をコントロールできるようになつていてる。

「…遅い」

次の瞬間には、メルトの手から、無数の黒い矢が降り注いだ。

威力はないが、この数はとても避けられない。

この数には破壊能力も対応しきれないだろう。

「…くつ」

ナイフの切れ味とまではいかないが、生身の人間の体では、かなり効いているようだ。

「早く回復を！」

まずい、天使にはたいして効いていないみたいだ。

ここまできて回復されでは…

「あの天使は回復呪文を唱える五秒間、身動きができない！」

スゲエ、そこまで見抜いてるのかよ。

「アラームラディー」

メルト得意の爆発系最大の呪文。

これで決まった！

！！！

… プスン

「…メーディー、どうゆうひつもりだ？」

『…わらい』

「なぜ、ここまできて……俺に魔力封じの呪文をかける?……なぜだ!」

『友達がいたんだ。巻き添い喰らつまうだろ』

「クソ野郎!俺が罰を喰らつはずだつたのに……なんでだよ、メティー……」

『やつぱりな。近くにいる人間に気付かないなんてメルトらしくないと思つたよ』

「メティーさんの事……すまなかつた」

『どうせメルトの事だ。自分の父親が俺の父親を殺したと聞いて、俺に申し訳ないと思つてたんだろう。』

だからワザと自分が撃を破り、手柄を俺一人にしようつてか?メルトの判断力も赤点だな』

メルトのその計画も、簡単に崩れさつた。

よつによつて……

巻き添いを喰らつくなつたのが……

リョータだつたから。

なんでリョータが……ここにいるんだよ……。

「分かつてゐるのか？お前は以前関わつた人間と接したんだぞ？」

『それは撃破り。つまり、魔界追放を意味する』

でも、もう決めちまつたんだよ。

友達は俺が守るつて……。

俺達のせいでのリョータが死んだら、舞にまた泣かれちまうからな……。

『じゃあな、メルト』

「この……判断力赤点野郎が……」

突然黒いホールが現れ、俺はそこへ吸い込まれていった。

リヨーナ視点で繰り広げられる異世界の物語り

「……ハアアア」

『どうした愛？いきなりため息なんてついて

「うん…ちょっと昨日の事で…ね」

昨日…花火大会の事か。まあ、そりゃリヨーナや彼女さんは可哀想だと思うよ。

ずっと一緒にいた親友が、人間ではなく、悪魔だった。なんて言わ
れ、しかも、昔の友人の俺を殺そうとしている。

それにムリヤリ魔界に連れ帰った張本人である愛を怨んでいた事を
知った愛の気持ちだって複雑だろう。

『気にするな。愛は間違った事はしていない。あのままだったら、
リヨーナにも危害が加わったかもしれないんだろ？』

「うん…。でもね、メディーは人間として育つたから、悪魔とは思
えないほど心が優しかったの。それが…私達を狙ってるなんて事も、
ちょっとショックで…」

それはメディーだつて仕事だから仕方ないだろ。
…つて、なんで俺は敵の肩を持つてんだろう？

「メディーなら魔界と天界の争いを辞めさせられるつて期待してた
んだけどなあ…」

俺は人間時代のメテイーは知らないから何とも言えないが、普通の悪魔と何かが違うと言つ事だけは分かつた。

『敵に情けはかけるな？油断したら俺達は殺されるんだぞ？』

「……ひん

ピンポン

玄関のチャイムが鳴つた。お密さんとは珍しくもない。どうせまた施設のおばちゃんからの差し入れだろ？

『はあーい。今開けます』

ドアを開けると、そこに居た人物は、意外な事にリョータだった。

『おひ、どうした？』

明るく話しあげてみるが、リョータは難しそうな顔をしている。

「ああー……その……なんだ……」

リョータが中々言ひ出さない時は、照れ臭い時だ。

前回の事をわざわざ謝りにきてくれたのだろうか？

「讓ぐんーちよつと来てー」

いきなり愛に呼ばれ、耳を引っ張られた。

「悪魔が近付いてきた。リョータくんには帰つてもうつて

悪魔… そうか。リョータには明の姿は見せられないからな。

『悪いリョータ… ちょっとこれから用があるんでな、また後で…』

… ちょっと冷たすぎたかな？ まあ後で謝れば良いだろ？

今日俺が譲の家を訪ねてきたのは他でもない。

天使にちゃんと謝りたかったし、明の事を聞きたかったからだ。

しかし、いつもアッサリ追い出されるとは… やはり怒っているのだろうか。

それに用事というのも気になる。

一人には悪いと思ったが、後をつけさせてもうつた。

二人は慌て氣味に走り、ある家に着いた。

中から出てきたのは一人の人間。

話を聞いたソイツは、顔色を変え、譲達についていった。

三人の様子から察するに、この後何かがあると言つ事は分かつた。

俺にも緊張が走る。

気付かれない様に最前の注意をはかりながら、尾行を続けた。

三人は人気のない道を進んでいき、ついには空き地に到着した。

ここは、周りに家もなく、すでに廃地と化している所だ。……こんな所に、なぜ……？

『さあ～て、来たようだな……』

讓が空を見上げて言った。

何か来たのか……？ そう思つて俺も空を見上げるが、何もいない。

なんだよ……そう思つた時、讓達がいきなりバックステップを踏み、素早く身を退いた。

何事だ……と思つた瞬間、讓達が立つていた場所に突然の爆発音と共に、地面がえぐれた。

状況がつかめない。

ただ、俺には見えない何かを奴らは見えている……！

そして俺は一つの答えにたどり着いた。

「明…明が来ているのか！？」

もはやそうとしか考えられない。

譲達の瞳は赤くなつていた。これは花火大会の時に見た目だ。

『破壊能力ーー！！』

「思考看破能力！譲君、右だ！！」

確に…奴らは誰かと戦つている。

やはり明…明がいるんだ！

俺はいても立つてもいられなくなり、譲の元へ走つた。

『リヨータ、危ない！』

…え？

ふと上を見上げると、眩しい程の大きな光が見えた。

「くらえ、人間！」

声は聞こえたが、姿は見えない何かがその光を俺達めがけて放つて
きた……。

マジかよ！？

強く閉じた瞼を開けても、何かが起きた形跡はなかった。

上空の方では煙が上がっているが、譲達に変化はない。

「リヨータ…くん？」

やっと天使も俺の存在に気付いた。

その時、上空に黒いゲートが現れた。

それは俺の目にも確認できた。

一瞬…ほんの一瞬だが、誰かがそのゲートに吸い込まれて行くのが見えた。

あれはまさかもなく…

「明…？明あーー！」

明だ。悪魔みてえな格好だつたが、あれは一年前に…最後に見た明はあの格好をしていた。遊園地で見た…あの明だ。

「譲！どうなつてんだよー今の奴は明だり？てめえ、やつぱり殺しざんか！？

譲の胸倉を掴み、怒鳴り散らしたところで、俺は頬に強い衝撃を受けた。

後方に吹つ飛び、前を見てみると、悪魔がいる。

碧い長髪に鋭い目付き。その目からは異様な怒りが伺え、それは俺に向けられたものだつた。

「てめえのせいで…」

その悪魔は俺に言つた。

俺のせい…？

意味が分からねえ。

何をしたって言つただよ。

譲、説明してくれよ。

誰だよコイツは。

明はドコ行つたんだよ。

「てめえが来なけりやなあ…メティイーは…」

メティー？

誰なんだって。

アイツはメティーなんて名前じゃねえ。

沖本 明。

そう呼んでたんだぞ？

「メティーは以前関わってた人間と接した。…奴は。奴は！」

悪魔が凄い力で俺の胸倉を持ち上げる。

苦しい。

なのに、頭が混乱してついてこない。

『破壊のつりよーー』

「邪魔するなーアラーム」

悪魔の手が光ったと思つたら、譲の足元が爆発した。

今のは魔法なのか？

「もひ…お前らと戦う理由がなくなつた。今まで悪かつたな

『メルト…だつたか？ちょっと待てよ。友の死を犠牲にする気か？
メディーはアンタに手柄を譲つたんだろ？ならかかつてこじよー』

「……」

抜け殻のよつになつた悪魔は握力を弱め、俺は地面上に落とされた。

譲と何か言い合つてゐるが、そんな事はどうだつて良い。

「そんな事より…やる事ができた」

『やる事…？』

「メディーを助けに行く。どうせ赤い日の剥奪に『えられた期限は
今まで。もうお前らと会う事はない』

『メディーは助かる…のか？』

「まあな。かなり危険だが」

『俺も連れてけ』

「貴様には関係ない」

『関係ある。メディーはリヨータを助けてくれたからな』

『おいおい、ちょっと待てよ。さっきから聞いてりやメディーってのは明なんだろ?』

『つて事は明は俺を助けるためにゲートに吸い込まれたつてのかよ?』

『この人間を救つたのは明自身のためだろ。貴様のためじゃない』

『理由はどうあれ、結果はメディーのおかげでリヨータは助かつた。俺はついてくぞ。』

『人間つてのは損な生き物だな』

『アンタだつてメティーのために自分を犠牲にしたくせに』

『フツ、着いてこい。譲!』

『頼んだぜ、メルト!つて訳だ。愛、大樹、留守番ヨロシクな』

『止めたつて無駄だね』

『いってらっしゃい。必ず帰つてきてね。』

『わかつたから泣くなよ、愛。また愛の作ったオムライス食いたいしな』

『バカ』

そう言って悪魔は譲を連れていつてしまつた。

今日の前で起きた事は現実か？

こんな非科学的な事が起きて良いのか？

話しが進んでいくのに取り残された俺は放心状態になつていた。

最終話～チヨメリヲ！～

…ん。

どいだ「ハハ。

手足が鎖で縛られている。

身動きできねえ。

『へへー…へへー…』

あがいてみると、手足を繋いだ鎖は音を立てるだけでビクともしなかつた。

「ほへ、やつと起きたか」

明かりを照らされ田が眩む。

かろうじて声の主の正体を確認すると、見た事もない悪魔だった。

『アンタ誰？』

「違法者を裁く者ぞ」

違法者…？

ああそりやか。俺はリヨーダを助けるためにメルトの呪文を封じたんだっけ。

その行為が以前関わった人間との接触に繋がるために俺は捕まつたんだった。

「蛙の子は蛙。父親に続いて息子まで違法者か

『父さんの悪口言つたテメエ。ぶつ飛ばすぞ』

「黙れ！」

身動きをとれないにも関係なしに、そいつの拳が腹に直撃した。

「つたぐ、まあお前を裁くのはこれが終わつた後だ」

さつきからソイツはモニターを見て楽しんでいた。

腹に走る衝撃に耐えながらも、俺もモニターを見る事にした。

「——続いての相手は——」

何だ？ このスタジアムは。

しかも大勢の観客に囲まれながら一人が戦っているのが見えた。

見間違えるはずがない。

あれはメルトだ。

体中ボロボロになりながらも戦っている……！

「……アラーム！」

「ブスン～

何やつてんだメルト！

もう魔力が残つてねえじゃんかよ！

そんな事にも気付かない程疲れ切つてているのか？

「ヒヒヒ、バカな奴」

対戦相手の死神みたいな奴が呪文を唱え始めた。

やべえってメルト！

「喰らえ……デスマトライ」

黒い光の光線がメルトに向かって一直線に伸びる。

「う……うあああああ！」

有り得ない程の素早い動きでかわしたメルトは死神の元へ突っ走る。

「らあああああ！」

振り切つた拳は死神の頭をもぎ取つた。

「——勝者メルト。これで49戦全勝！ 残るはあと一試合となりましたあ！」

49戦！？ 何やつてんだメルト！！

「メディー、『』は違法者を助けるコロシアムだ

何すかそれ？

「観客は金を払つて殺し合いを楽しんでいるのさ。挑戦者が50戦勝ち抜けば、メディーは助かる」

『マジで！？ウッヒョオー、やつたぜー！』

……なあ〜んて言つ訳ねえだろ！ があ！！

メルトを開放しやがれえ！

俺は力いっぱい鎖を契ろうとした。

しかしそれも虚しく、鎖は切れない。

「無駄だ。その鎖は魔力を封じる。それにメルトは自分から『』で

来たんだ。メディーが辞めるなんて言つたら、メルトの努力が無駄になるぞ?」

ちくしょう……体に力が入らねえ……。

「ちなみに……マルトがメディーを殺した……と言われたらしいな

父さん……の事が。

「メディーもお前と同じ、ここに連れてこられたんだ。同じ様にマルトが助けにきたが……マルトは

「……最後の相手は……」

モニターに映つたのは、メルトの身長の軽く十倍はある、ばかでかい化け物だった。

「マルトはコイツに勝てずに殺された。そして……メディーもな

そつか……そういう事か……。

「ゴメン、メルト。一瞬でもお前を怨んじまつた自分が情けねえよ。

「親が越えられないのを時代を越えて今度は息子が……ねえ。本当に貴様らは馬鹿だ! 所詮は蛙の子は……」

「ガシャン~

鎖が外れた……。

「誰だ！？」

「——破壊能力！——」

一瞬にして鎖と違法者を裁く者を破壊した。

こんな事ができるのは…

『…譲？』

「大丈夫か？」「

なんで…譲が俺を助ける？

俺はお前を殺そうとしたんだぞ？

「リヨータの事、助けてくれた礼だ」

『リヨータは俺の友達だからな』

「フツ、早くメルトのトコ行くぞ」

俺は部屋を後にし、コロシアム場へ向かった。

それにしても人間がこんな所に入つて来れるなんて…な。
どうせメルトが連れて来たんだろう。

譲だつて体中傷だらけだ。

『…ありがと』

「まさか悪魔に礼を言われるなんてな」

笑った讓。やっぱ人間の心って暖かいんだな。

コロシアムに駆け付けた俺達だが、すでにメルトは地面に倒れていた。

『メルトおー！寝てんじゃねえよ！マルトさんは…そいつに殺されたんだぞ…！』

俺はメルトの心に話しかけた。テレパシーってやつだ。

「マジかあ…じゃあコイツに勝たなきや…な
『そうだ、立て』
「でもよお…体が動かないんだ。メディーも助かった事だし…もういいかな」

「そんなのダメ…――慈悲能力！」

光がメルトを包み込む。

体の傷が回復したメルト。

『…リューフア』

「愛！それに大樹！お前らは待ってるって

「そんなの出来る訳ないじゃない！」

全く…俺なんかのために…どうにもこいつもお人よしな連中ばっかりだぜ。

「——ウイークポイント看破能力！メルト君、そいつの弱点は角だ。そこが魔力の源になってる」

沢田 大樹：人の思考や弱点を読む男。

その能力の複合として先読みなどの技も編み出すバトルセンスの持ち主。

「——慈悲能力！私の魔力をメルト君へ…！」

エン・リューファ：傷を癒す天使。

天使なのに能力を持ち天界を追い出される。その能力だけでなく、心もまた温かい。

「メディー、大人しくしろ」

騒ぎを聞き付けた追つてが俺の体を押さえ込む。

「——破壊能力！」

木之下 讓：何でも破壊する能力を持つ男。
それも悪用はせずに人の心を持ち通す男。

「サンキュー、みんな。待ってる。今…コイツを」

メルトからの「テレパシー」はそこで途切れた。

「アラームラディー！魔力フルパワー！！」

さらに博士から教えてもらつた魔力一点集中により、凄まじい光線爆発が化け物の角どころか、体ごと大爆発。

「…しょ…勝者メルト！」これで50戦勝ち抜き達成————！」

巻き上がる歓声。腐つた観客も、さすがにメルトのこの努力には関心したみたいだ。

そして俺達は無事に地上に帰る事ができた。

『無茶しやがるなあメルトは』

「まあ何とかなつたじやん」

…メルトも俺の性格に似てきたな。

「父の仇も討てたし、良かつたぜ」

晴れやかな笑顔を見せるメルト。

「あれ？ 『いつ、笑うんだっけ？』

おっと、それより譲に礼を言つとかなきやな。

『ありがと…な。その…助けてもらつて』

「別に…アンタら良い奴みたいだし…。天使と一緒に暮らしてんだから、悪魔だつて仲良くなれっかな~思つてさ」

譲：「コイツは本当に人間がよく出来ている。

過去の両親の話を聞いた時、ビシとなく俺と同じ雰囲気を感じた。

両親から愛を受けずに育つた人間。

「メデイー…その…一つ、聞いてもイイか？」

『なんじやい？遠慮なく言つてみなさい？俺達はもうブリーフザーバーさ』

「メデイーは…人間と悪魔の子供なんだよな？辛い事とかあつたか？」

『う~ん…ねえな…』

俺の回答が意外だったのか、譲は『えつ？』つて顔をする。

『つか自覚なかつたし。人間として普通に育つたし…それがどうかしたのか?』

「愛と…人間と天使が結ばれると思つか?」

・・・・・。

『ほえええ! ? マジかよ譲つちー愛と…えええ! ?』

「うつせえな! 好きなんだから仕方ねえだろ!」

照れちやつてるよ、カワイイねえ。

『俺は良いと思づぜ』

「……え?」

『天使と人間の子供なんて…カツコイイじゃん?』

俺は譲に笑つてみせた。

『もしお前らが捕まつた時…今度は俺が助けに行つてやるよ

「…メディイー」

『お前らに子供ができるて、事実を知つたら、そりや子供だつてビックリするだらうな。……でもな、水が入れ物で形が変わるみたいに、その子がどうなるかは、譲と愛次第じゃねえの?』

「……うしへねえ事囁うな」

『ハハセヌヨ変態』

「変態じやねえー。」

『天使に惚れちやつたヘンターハーイー。』

「じゃあお前の両親も変態じやねえかー。」

『父セト母セトの懸口囁うなーーてめえ田舎狩るヤー。』

「やつてみのやハハあー。」

『んだとハハあー。』

-----。

「つたぐ、メティイーの奴……あんな楽しそうに笑いやがつて

「あれ? メルト君ヤキモチ?」

「変な事言つよ大樹。お前こそ、譲があんな楽しそうだぞ？」

「ほんとに……想像つかないよ……あの暗かつた譲君が……あんなに……」

「あ……メテイーの奴、呪文使つ氣だ……！」

「やばい……譲君の目が赤く……！」

「止めるぞ大樹！」

「わかった！」

「男つて馬鹿ね……でも私の予想は当たつたみたい。人間も悪魔も天使も……仲良くなれたのは明くんのおかげね。」

さあて……皆仲良くなつちゃつたけど……閻魔様と神様はこの後どうするのかな？」

悪魔、天使、人間。

姿形は似てるものの、性質は全く違う者が集まつた時、波乱は起る。

ただそれを乗りきつた時、至福とも言える日々が待つてゐるだらう。

その者達によつて……今日も世界は成り立つ。

最終話～チョメリップ！！（後書き）

完結しました。ビーも、作者のタンポポです。　　いやー、
今作も前作同様、微妙な終わり方ですね　　はい、反省します。
実は今、新作の小説を二つも書いてるので、チョメリ
ップひとつと終わしたい気持ちでいっぱいでした（笑）このサイトの
コメティーで『ヤクザの学校』・『死んじやうんだって』という
タイトルを見つけたら、ぜひ読んでやって下さい。　チョメリップ、
お付き合いして下せつてありがとうございましたー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2105c/>

チョメリップ2

2010年10月10日05時07分発行